K43

戸川殘花口述

江戸史蹟

東京 内外出版協會

291.36 To376e

目次

芝區……一頁
八つ山○御殿山○泉岳寺○大木戸○南洲と海舟との講和談判場○攻玉舍—最初の慶應義塾—江川の調練場舊跡○濱御殿○會仙川○三緣山增上寺○德川家の墓地○西向さ觀音○御成り門○竹芝—伊皿子○白金臺町○上行寺—承敎寺其角、一蝶の墓○昔の有馬屋敷は近頃迄の海軍造兵廠○廣尾の狸そば—狐鰻○日蔭町○愛宕山
京橋區……二六
新橋藝者○銀座○海軍大學校—白川樂翁の邸跡○西本願寺別院○月島—石川島—佃島○明石町—淺野內匠頭の屋敷—明治初年の米國公使館○奥平大膳大

国立国会 29.1.18 図書館
315482

夫の邸跡—福澤先生『西洋案内』著述の長屋○紀國屋文左衛門の本宅—河村瑞軒の屋敷跡—楓川—尾崎紅葉の誕生地○國名前の町々○風流の稱呼○新富町、一時は京都の島原

日本橋區……三七

日本橋○日本橋の起原○當時の地勢○當時の天下○一里塚の元標○日本橋の高札○橋邊の晒者○日本橋と白木屋○日本橋の架け替へ○日本橋と魚市場○漁船に對する江戸趣味○寺門靜軒の江戸繁昌記○魚市場を保存したい○日本橋の名稱起原○あらめ橋—おやぢ橋○第一銀行—牧野家の屋敷—兜町—鎧橋の因由○茅場町の藥師—其角の住居○永代橋—三叉—高尾の斬られた場所○堺町—茸屋町○三越呉服店—昔の越後屋○日本銀行—本石町の時の鐘○舊吉原○江戸橋—マストドンの骨○堀留○傳馬町の牢屋

神田區……七六

柳原—お玉ケ池○神田明神○雉子橋

麹町區……八三

昔の本丸—西の丸—二の丸—三の丸○參謀本部—昔の井伊家の屋敷—加藤清正の屋敷跡○霞ケ關○南北の町奉行○辰の口評定所○番町皿屋敷○九段坂—中坂○御大老の屋敷○赤坂見附—清水谷公園○山王樣—平河天神

赤坂區……一〇五

赤坂御所○溜池○青山墓地

麻布區……一〇九

四谷區……一一一
牛込區……一一五
小石川區……一一七
傳通院○小石川植物園○豐島ケ岡○五月雨塚○目白不動—鶴龜松○鷄聲ケ窪
本郷區……一二六
下谷區……一三〇
淺草區……一三四
觀音堂○駒形堂○江戸趣味と淺草、吉原

本所區……一四一
深川區……一四三
郊外……一四五

江戸史蹟

芝區

八ッ山

昔の東海道、品川の宿から江戸へ來ると、左に見えるのが、八ッ山である。八つ山は今、毛利公爵家の御屋敷であるが、昔は松平大和守の邸下で、一寸寂しい所であッた。夜にでもなれば、唯品川へ通ふ駕籠の勇ましい聲がすゝのみで、提灯が宛然飛んで行く樣に見える。然し、晝は中々大廣な賑ひで、

雨が降らうが、風が吹かうが、日本六十餘州の大名が、參勤交代の行列、其の家々の格に從ひ、多いのは何百人、少ないのは何十人の供を連れてゆく。殿樣の御駕籠を眞中にして、二本帶した武士は言ふまでも無く、幾條かの長柄の槍、薙刀なども之に並び、飴屋の樣な大きな傘や、金の紋を輝らした挾箱を、眞先に持ち出し、丁度今では地方のお祭の時の外には見られない樣な圖である。馬は牽き馬と云ッて、後の方から行く。お茶辨當、お醫者、合羽笊、長持が幾竿、まるで中等以上の家の、世帶道具一切を持ち運ぶ樣なものだ。かうした大勢の行列が、今の電車道を練り行く樣を想像すると、隨分不思議ではないか。

右の方を眺めると、品川の海が、昔ながらに長閑な漣を打ち寄せて居る。其の海上を走る千艘萬艘の船々、嘉永の昔、亞米利加の水師提督ペリーが、江戸灣に闖入ッて來た時、其の眞帆白帆いと華麗やかに、帆柱はさながら林の如く立ッて居るのを遠望して、意外にも海軍の盛大なるに驚いたと聞くが、然し其の實、五六百噸の船が一艘縱横に乘り廻せば、秋の木の葉と碎け散る、纖弱き船であッたのだ。今は觀艦式でもあれば、我國の艦艦だけでも數十隻、ペリーの乘ッて來たものなどよりは、遙に立派な軍艦がズラリと並ぶ次第である。廣重の繪で見ると、舊江戸の品川は、穩な景色である。

御殿山

此の八ッ山の西北に當りて御殿山、今は新築の家屋が悉皆立ち並んで居る。こゝも中々變遷のあッた場所で、寛永の昔は、大名が江戸に入ッて來ると、時の老中（今の大臣の樣なもの）が德川將軍の代理にこゝまで出迎えに來た處である。又その御殿山と名づけられた所以はこゝに將軍家の別殿が在ッたからだ。こゝは櫻の名所で、智惠の內侍の狂歌に、

御殿山高麗芝の青だゝみ花のふすまをひく霞かな

と云ッた様に、吉野山其のまゝを移したのかと思ふばかりの春の景氣であッた。此處も彼處も幕ひき渡し、花にも優る御殿女中や、町方の女房又は娘連、一時千金二千金と、花と月とを賞した所である。

又燕子の狂歌に

奥家老ひらきなほりて花の供幕より外へ女中ちらさず

と云ふがある。今の女學校の幹事が、女生徒の監督には頭痛鉢卷をするも、同じことである。

又御殿山には、明治の少し前、英國公使館を建てたことがあるが、其の公使館が落成して、英國政府へ引き渡す時、浪人が一夜の間に、燒き討ちをして了ッた。然るに其の浪人が（當時外國人を斬り、外國館を燒き、何でも異人臭いことを嫌ひさへすれば、日本の大忠臣、大和魂の本領と心得たのだ）

後には、皆明治の元老と仰がれた人であッた。社會は可笑しきものである。

此の御殿山は、今は昔の有樣が全然無い。文久の頃既に早く、櫻は大方截られた。今日品川沖に海鼠の樣な形をして居る御臺場は、實は其の頃、御殿山の一部の土を掘り崩して造ッたものである。其の頃より、最早此の名所は殺風景に爲ッて了ッた。今の高輪の、紳士紳商の住宅の並ぶ邊が、昔江戸の一名所だッたと思ふと、南柯黄粱の一夢である。

泉岳寺

此の御殿山を見て先へ行くと、例の泉岳寺、四十七義士の墓所、昔も今も場所は變らぬが、寺は昔の方が、遙に立派であッた。義士談は、今猶世人に歡迎せられて、新聞なども此の講釋が載ッてないものは無い位、芝居でも、浪華節でも、義士の話となると、何時でも當る位である。義士の墓は何れも

小さな石碑であッて、青山邊の墓地へ行ッては、滅多に見當らない位、見すぼらしいものである。然し其の墓前に焚かれてある線香は、二百餘年間、未だ曾て絶えたことがないと云ふところが愉快だ。徒らに墓碑の高低を競ふよりは、長く線香を焚かるゝ人と爲ッた方がいゝ。

大木戸

此の泉岳寺の前を通り越すと車町。昔は此處に大木戸が在ッた。前に述べた大名の行列も、此の木戸より内を、堂々と其の列を整へて參府したものである。此處からが本當の昔の江戸、大木戸から南は江戸の外であッた。

それから札の辻、此處は今の薩摩原の電車乘り換へ場所で、ずッと昔は、こゝに高札が掛けて在ッた。後には、札の辻は名ばかりで、前の大木戸が、江戸の境界になッたのである。

南洲と海舟との講和談判場

札の辻は、維新の前にも既に名のみとなッた程だから、今は猶更知る人は無い。然し此處には、江戸ッ子も東京人も、共に必ず記念すべきものがある。其れは今猶殘ッて居る、古くさい土藏だ。其の土藏は、明治前には薩州侯の御屋敷の一部であッて、西郷南洲、勝海舟の兩雄が、江戸城引き渡の講和談判を開いた場所である。其の結果、德川幕府の終末は談笑の間に大事が濟み、江戸城二百五十年の榮華は、兵火の禍を免れることが出來た。大國を治むるは小鮮を煮るが如しと、哲人は言ッたが、南洲對海舟の講和談判の如きは、眞に日本史の精華と思はれる。こゝは江戸ッ子のみならず、總ての日本人の記念して置くべき場所かも知れぬ。

攻玉舍　最初の慶應義塾

江川の調練場舊跡

薩摩原から又進むと、新橋の鐵道構内へ近い新錢座へ來る。此の新錢座には見逃すことの出來ぬものが二ッある。一ッは攻玉舍、一ッは福澤先生の慶應義塾の跡、共に幕末と明治の初に、新文明の案内者となッたので、貴重な史蹟と謂ふべきである。

又鐵道線路を越して、今の芝離宮の御構内に、大きな銀杏の樹があるが、此の銀杏の邊が、江川の調練場であッた。此の江川といふ人は、伊豆韮山の代官をして居ッた太郎左衞門英龍のことである。其の門下生が此處で練兵をしたのである。故男爵大鳥圭介氏が敎頭で、米國から漂流者として歸國した中濱萬次郎も働いて居ッた。今の陸軍兵學校の樣なものである。これが洋式

の日本陸軍の最初と言ッても宜い。長州でも薩州でも、肥前でも土佐でも、乃至陸奥でも出羽でも、舊式の戰法を止めて、二本帶した武士が鐵砲を擔ぎ、文明的兵式の空氣を始めて吸ッた場所である。これより四十年そこ〳〵にして、日本の兵士が、世界最强の露國を打ち破ッたことを思ふと、此の舊江川練兵場の遺跡は、益々忘れることの出來ない名所となッて來る。

此の調練場の近所に、新錢座と云ッて、錢を鑄た所があッた。京橋の銀座は銀貨を製造した所であるが、新錢座では錢のみを鑄造したのである。然し今は何處であるか、其の俤も無い。

濱御殿

芝離宮から少し北東の方に當ッて、樹木の鬱葱と生ひ茂ッて居る所がある。そこが濱離宮である。今は普通人の拜見を許されないが、昔とても所謂貴族

の外は、入ることが出來ない、普通の大名でも入ることが出來なかッた。唯徳川氏大奥の、言はゞ御遊場所であッた。此處の歴史は中々舊いものであるが、まあ徳川氏の別殿と見て置けば宜からう。今の御庭は昔とは變ッて居るが、其の大體は昔時の俤を存して居る。中島に橋が架ッて、藤棚のあるところなぞは、昔其の儘の景色である。こゝで一寸徳川氏大奥の模樣を話さうならば、姫君達が此の別殿に御出になると、櫻の樹の間、松の蔭に、逍遙する御供の御殿女中は、すばらしい美觀であッたさうだ。姫君始め、御供の女中が締めたと云ふ腰帶を見たことがあるが、緋の緞子の地に、立浪に千鳥を金銀の絲で繡ひ出してあッた、此の腰帶の模樣なども、冬は濱千鳥、春は胡蝶と云ッた樣に、時候に應じて繡はせられたものださうだ、數十の奥女中が、模樣も色も同じ裝ひと云ふことは、出來ない事でもあらうから、褄襠を結びあげる爲めに用ふる、腰帶をお揃ひにしたものである。

會仙川

濱御殿を出ると、新橋鐵道構内となる。此の構内の眞中に、會仙川と云ふ溝の樣な川がある。此の川は會津の屋敷と、仙臺の屋敷との間にあッた爲め會仙川の名が出たのである。仙臺の屋敷と云ふは、即ち松平陸奥守の屋敷、此の屋敷の門前で、元祿十五年の十二月十五日の朝、淺野内匠頭の舊臣四十七人が、吉良上野介の首を提げて、休息をしたと云ふ、名高い話がある。今は汽車の煙のみであるが、昔は威儀堂々たる大大名の屋敷が甍を並べた所であッた。

三緣山增上寺

此の仙臺屋敷から、西の方へ切れると、關東十八檀林の一なる、三緣山增

上寺、今は芝公園となッて居るが、日本中に名を聟かした大寺である。昔の建物で、今に殘ッて居るのは、松原前の山門唯一ッである。近頃黑本尊が燒けたから、他には開山堂と經藏が殘ッて居る位、誠に惜しい事である。

この山門の並びに、安國殿が在る、德川家康を祭ッた所、此の安國殿の裏手を、山へ登ッて行くと、五重の塔がある。此の五重の塔と云ふものは、關東では、左右の指を折るだけは無い。特に增上寺の五重の塔は、大樹の間に隱見して、偉觀を呈して居る。此の塔のあたりを、丸山と稱して、昔は滅多に人の出入することを許さぬ所であッた。近頃また此處に古墳を發見して益々名所となッた。

德川家の墓地

此の丸山の西の方が、即ち德川家の墓地、昔の御靈屋である。日光を結構

と云ふならば、此の御靈屋も亦第二の結構たるを失はないのである。まるで金と漆と朱で固めたものと言ッてもよい位、目の覺むる建築である。

お靈屋は、往時は增上寺の大僧正か、係りの坊さんの外は、僅の人々が出入したのみ、誰も入ることの出來ない場所であッた。恐らくは、こゝを見ると、目が潰れる位には考へて居たのであらう。此の御靈屋に續いて御本殿があり、又增上寺の左右に御代々の御靈屋が在る。その石燈籠の數ばかりでも幾百を以て算へる。日英博覽會に、此の御靈屋の雛形を出品したが、實に我國の誇である。然し慶長の昔を考へると、此の邊は武藏野の中の野山、其の野山の端れは即ち海の浪打ち際で、此の邊から高輪にかけて、一帶の入海であッたさうだ。今は日增しに昔の俤が變り行き、遠からず、更に此處に大公園を設置せらるゝと聞くが、遊ぶには至極よい場所が出來るであらうけれども、歷史的の寂は見ることも味はふことも、殆んど出來なくなるであら

う。

西向き觀音

此の增上寺の西に、辨天の池がある。此の辨天から、赤羽の方へ通ずる一條の道があるが、今は紅葉館へ往來する馬車や自働車の轟く場所、しかし昔は鎌倉街道が此の邊にあッたといふ言ひ傳へがある。山の上に、西向き觀音といふ觀音樣があるが、これが江戸開府以前の觀音堂である。

それから麻布の方へ出る道に、紅葉館があるが、こゝは昔、淨瑠璃光寺、又は金地院と云ッた大寺の境内であッた。今も昔の大楓樹がある。今は其の金地院も、見る影もなき觀音堂が、唯一ッ殘ッて居るばかりであるが、江戸の盛な時分には、大層な勢の有ッた寺で、此のお寺の和尚崇傳は、德川家康の參謀官、又は秘書官となッて、政治上に功績のあッた人である。

御成り門

扨、增上寺の山門前の電車に乘ッて東の方へ行くと、そこが御成り門、今はお成り門の門は無い、他へ移された。此の御成り門といふのは、德川將軍が、增上寺へ參詣の折に、通ッた門である。赤く塗ッた立派な門であッた。今の東京人には、知らぬ者が多いが、神田の方から、上野公園へ行く廣い道を、昔は御成り街道と云ッた。これも將軍家が、上野寛永寺に參詣せられた道である。

竹芝　伊皿子

前の山門前を西へ行くと、高輪臺へ出る。伊皿子の邊が、昔は竹芝と云ッた所で、恐らくは浪打ち際の小山であッたらう。更級日記に、竹芝といふ寺

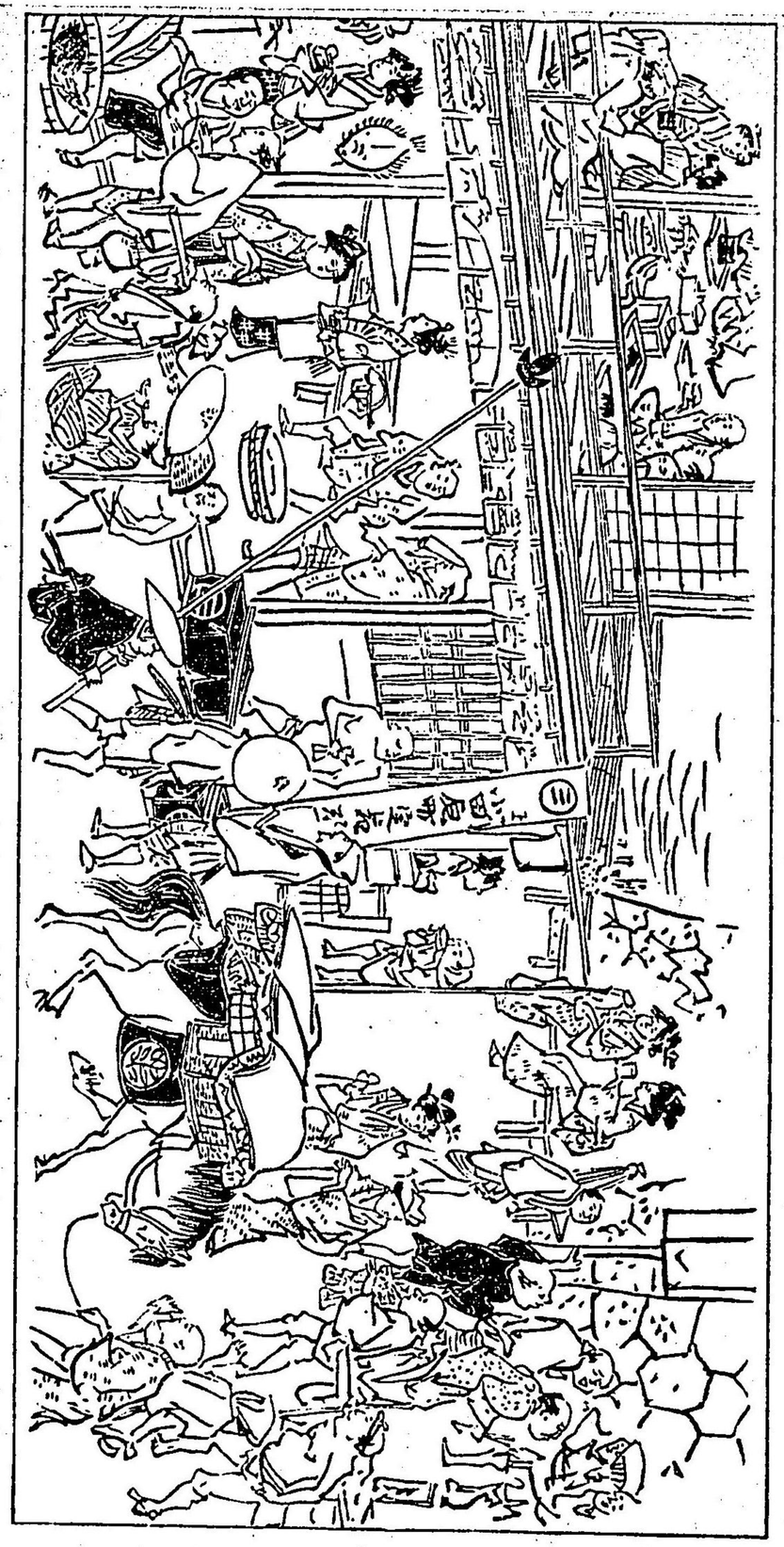
ありと書いて、奇拔な戀物語がある。

『昔或る都にて、或る姫君が、衞士の話に、酒壺の上になッて居る瓢簞が、南風が吹くと、北へ靡き、北風が吹くと、南へ靡くと云ふことに聞きほれて、到頭、衞士と二人で逃げ出し給ひ、武藏の竹芝の浦で夫婦となり、住んで居られた。後その跡に、竹芝寺といふ寺を建てたと傳へられてある。』

此んな事からして、竹芝と云ふところは、殊に名高い所となッた。今の三田臺町濟海寺が、其の跡だとも云ッて居る、華頂宮樣の御屋敷の跡なども、恐らく竹芝の跡であらう。

白金臺町

竹芝から更に南すると、即ち高輪臺町、此の臺町には、今は宮樣の御屋敷



がある。高輪御殿と申しあげる所はこゝで、畏くも、東宮殿下の御成長遊ばした所である。其の後、兩内親王殿下の御住居で、今も猶、朝香宮殿下は御住居になッて居る。此の高輪御殿は、昔は熊本藩主細川氏の中屋敷で、凡そ三萬坪もある廣いお屋敷である。特に明君の聞え高き細川重豪(銀臺公)が住ッて居られた。又、大石良雄以下十七人の切腹した有名な所で、現に今の御殿の御外庭に其の遺蹟がある。畏れ多くも、宮樣は其のところを御記念遊ばして、竹矢來を造ッて、高札が立てゝある。元祿當時の圖と照して見ると、今日猶、是れが彼れかと、想像さるゝ老樹も殘ッて居る。畏きあたりの御住居故、入るわけには參らぬが、泉岳寺に參詣する者は、遙に御殿の方を望んで、當時を偲ぶも、亦ゆかしき事ではないか。

上行寺　承教寺　其角、一蝶の墓

扨このお屋敷より、少し先に、上行寺と云ふ寺がある。二本榎元町である。此の上行寺には其角の墓がある。英一蝶の墓は、二本榎一町目の承教寺に在ッたが、近頃移轉されて了ッた。一蝶の辭世の歌の、

まぎらかす浮世の業のいろどりも
　ありとや月のうすゝみの空

と云ふのを刻した墓碑も有ッたが、まこと浮世の變遷である。此のあたりは、歴史に趣味ある者の、低徊去り難きところ、泉岳寺を始めとし、竹芝の濟海寺、義士の切腹の場所、名君銀臺公の御住居、さては其角、一蝶の墓、此の内の一ッがあッても、一地方の名譽となるものばかりである。其の他白金臺町一町目には、瑞聖寺と云ふ寺がある。黄蘗宗の大寺である。

昔の有馬屋敷は近頃迄の海軍造兵廠

この瑞聖寺邊より後戻りして赤羽へ出るところに、此の頃まで、海軍造兵廠、もとの有馬家の屋敷があッた。此の有馬氏は、筑後久留米の藩主である。此の屋敷には、中々いろんな面白い話のある所、今は螭殼町に移ッたが、名高い水天宮、祭りの時など、雜沓の極は死人さへ出す位の繁昌の水天宮も、此の屋敷に在ッたのだ。又此の屋敷には、有名な火の見櫓があッた。江戸の諺に、『高いものは有馬の火の見』と言はれたほどに高かッたのだ。いま一ッは、角力で名高い小野川が、化け猫を殺した所も此處である。明治前までは、此の化け猫を祭ッた社が在ッた。化け猫、火の見櫓、水天宮、いろ〳〵面白い話である。又いま一ッの珍談は、昔この有馬の殿樣に鰻の好きな方があッて、靈岸島の大黑屋へ、鰻の御用のある時は、御家來が、紋ちらしの重

槍持であッたが、主人の槍を、獨斷で短く切り、そして自分の腹をかき切ッて死んで了ッた。如何いふわけで切ッたのかと云ふに、主人の槍が馬鹿に太く、又長くて、とても力の無い者では持ちきれない。昔の大名の槍と云ふものは、今の聯隊旗同樣、生命がけで守らねばならぬ重大なものであッた。其れが勘助には持てるが、他の槍持が困ると思ッて、身を殺して槍を切ッて了ッたのである。武士氣質とは即ち是れだ。又愛宕山の男坂は、昔から名高い石段で、見下せば、眩暈り、見上ぐれば、氣も遠くなる位で、高いものと言はれて居ッた。其の石段を、曲木平九郎と云ふ馬術の先生が、馬で驅け上り、紅梅一枝を折ッて、再び下りて來たと云ふ有名な話がある。眞か僞か、判然はせぬが、兎に角曲馬の上手な人であッたと見える。講釋師が張り扇で、寄席のお客をうならせたものだ。尤も明治十五年頃にも、百川と云ふ人が、馬に乘ッて、上ッたことがある。其れはそんなに名高くない。此の愛宕下に、

田村町といふ所がある。昔は田村右京太夫の屋敷の邊である。此處にお化け銀杏といふ大木がある。此の銀杏の木は、夜になると、太鼓をたゝき笛を吹き、馬鹿囃子をやると云ふ評判の立ッた木である。(實は川勝といふ隣邸の庭に在ッたのであるが、田村のお化け銀杏と言はれて居ッた。)然し此の話より名高いのは、田村家の庭前で、淺野内匠頭が切腹した事だ。血染の紅梅、血染の石、今も田村子爵の邸にあるが、兎に角、お化け銀杏は、淺野内匠頭の名と聯想される樹である。

以上話した外に、芝區には、未だ〳〵名高い所がある。今の慶應義塾は昔の三田の島原藩邸で、福澤先生は、初め其の舊藩邸の三階のあッた御殿を、其の儘に、塾の講堂に用ひられた。

それから例の神明樣、芝の神明と云ふと、江戸ばかりか、日本國中誰知らぬ者もない位の名所であッた。又久保町には琴平神社がある。昔の金比羅樣

箱を腰に結び付け、馬に乗ッて鞭を揚げ、赤羽から靈岸島まで、其一文字に驅け出すと、大黒屋では商賣柄、ちやんと鰻が燒いてあッて、冷めぬ樣に炊きたての御飯で包む、其れを腰に着けるや否や、又早馬で飛んで歸ると、恰度御晝の御飯に間に合ふ樣になる。然し鰻飯だと思ッて、御飯を食べてはいけない。此の御飯は、鰻を冷さない樣に包んだ御飯である。今日などは、騎兵が上官の命令で、鰻飯を買ひに行く樣なもので、隨分變ッたことである。

廣尾の狸そば　狐鰻

此の赤羽の前は、古川の流である。上流に沿うて溯ると、廣尾へ出る。昔は廣尾の原と云ッて、武藏野の俤が遺ッて居た。こゝに狸そば、狐鰻と云ふ二軒の飲食店があッて、中々繁昌したものである。狸の方は、福澤氏の別邸のあたりと思ふが、狐は何でも、京橋區三十間堀邊に引き移ッて、人間の狐

鰻と成ッて居るとか、變れば變るものである。

日蔭町

扨、これから、ずッと東へ飛んで、日蔭町へ出る。こゝは芝區の東端である。昔は片側町で、日蔭であッた爲め、其の儘の日蔭町と呼ばれたのだ。そこに古着屋が並んで居る。江戸の方言で、柳原物とか、日蔭町物とか言へば、安價物・古物、下品な物との意味を表はしたのである。今日は日あたり町となり、安値物どころか、えらい立派な物が並んで在る。

愛宕山

此の日蔭町近傍で名高いのは、例の愛宕山、芝公園の山續きで、青松寺と云ふ寺もある。其の寺には、槍持勘助の墓が在る。槍持勘助は、或る大名の

槍持であッたが、主人の槍を、獨斷で短く切り、そして自分の腹をかき切ッて死んで了ッた。如何いふわけで切ッたのかと云ふに、主人の槍が馬鹿に太く、又長くて、とても力の無い者では持ちきれない。昔の大名の槍と云ふものは、今の聯隊旗同樣、生命がけで守らねばならぬ重大なものであッた。其れが勘助には持てるが、他の槍持が困ると思ッて、身を殺して槍を切ッて了ッたのである。武士氣質とは即ち是れだ。又愛宕山の男坂は、昔から名高い石段で、見下せば、眩暈り、見上ぐれば、氣も遠くなる位で、高いものと言はれて居ッた。其の石段を、曲木平九郎と云ふ馬術の先生が、馬で驅け上り、紅梅一枝を折ッて、再び下りて來たと云ふ有名な話がある。眞か僞か、判然はせぬが、兎に角曲馬の上手な人であッたと見える。講釋師が張り扇で、寄席のお客をうならせたものだ。尤も明治十五年頃にも、百川と云ふ人が、馬に乘ッて、上ッたことがある。其れはそんなに名高くない。此の愛宕下に、

田村町といふ所がある。昔は田村右京太夫の屋敷の邊である。此處にお化け銀杏といふ大木がある。此の銀杏の木は、夜になると、太鼓をたゝき笛を吹き、馬鹿囃子をやると云ふ評判の立ッた木である。(實は川勝といふ隣邸の庭に在ッたのであるが、田村のお化け銀杏と言はれて居ッた。)然し此の話より名高いのは、田村家の庭前で、淺野内匠頭が切腹した事だ。血染の紅梅、血染の石、今も田村子爵の邸にあるが、兎に角、お化け銀杏は、淺野内匠頭の名と聯想される樹である。

以上話した外に、芝區には、未だ〳〵名高い所がある。今の慶應義塾は昔の三田の島原藩邸で、福澤先生は、初め其の舊藩邸の三階のあッた御殿を、其の儘に、塾の講堂に用ひられた。

それから例の神明樣、芝の神明と云ふと、江戸ばかりか、日本國中誰知らぬ者もない位の名所であッた。又久保町には琴平神社がある。昔の金比羅樣

である。神様にも、時に流行不流行はあるものと見え、昔は水天宮よりも、此の金比羅の方が盛であッたが、明治の初めに、讃岐の金比羅は、佛教の神様ではなく、神道の神様だと云ふので、琴平と名を更へた。どうも、此の改名から、流行が下火となッて、餘り流行らなくなッた樣だ。が、今でも毎月十日には、中々賑やかである。

また大久保彦左衞門の墓の在る所は、三光町の立行寺である。全體、彦左衞門と云ふ人は、評判程に働いた人かどうかは判明せぬが、三河物語などを見ると、立派な武士である。江戸時代には、奇行があると、必ず大久保彦左衞門と相場が極まッた樣な鹽梅で、德川政府でも、大久保の爲た事は、十中八九までは放任して置いたものと見えるが、後には講釋師連の張り扇から叩き出された談柄も多いらしい。彦左衞門の墓には、今日でも香華が絶えず、何病かに御利益があるとかで、參詣者が常に群集して居るところが妙だ。然し彦左衞門の墓は、靜岡市にあるのが眞物である。淫祠の流行は、東京ほど盛な處はあるまい。江戸以來、こんな風に崇まれた墓は、隅分澤山ある。鼠小僧次郎吉の墓も、參詣人が勝負事の守りとして墓石を缺いて行くので、古い墓石が、石垣の樣に積みあげられてある。谷中の墓地にある西野文太郎の墓なども、參詣人が其の石を缺いて行く。八百屋お七の墓なども、一旦缺かれて無くなッたが、再建の石も、今又三分の一ほどになッて了ッたさうだ。どうも東京ほど迷信の强い所はない樣である。此の外、愛宕町の天德寺には蘭學の鼻祖杉田先生の墓がある。高輪東禪寺には、大槻磐溪先生の墓がある。三田長松寺には荻生徂徠の墓がある。しかし學者の墓には、誰一人として參詣する者が無い。學者と云ふ者は、今も昔も、貧乏で寂しいものだと見える。

京橋區

新橋藝者

京橋區を南の方から話して行くと、先づ新橋となる。此處は昔、芝口御門と云ッて、今の櫻田門の樣な城門が有ッた。(正德年間のことである。)此の邊に金春新道と云ふ處があッた。今では西洋造りの堂々たる家屋が並んで居るが、明治十年前は、小さな意氣な造りの家のみで、所謂藝者なるものが居ッた。今は柳橋が衰へて、新橋藝者が覇を稱へ、最近は赤坂などが、却ッて屈指の場所となッたが、明治の初めでも、金春即ち新橋藝者は、第二位を占めたものである。金春と云ふ名前は、嘗て能役者の金春太夫の屋敷地であッたのに因んで起ッたものである。

銀座

此の新橋から京橋へ行くと、先づ銀座がある。江戸の昔、こゝで銀貨を鑄造したことがあるところから出た名である。竹川町には朱座の在ッたこともある。此の銀座を中心として、京橋區は、西の方は狹く、東の方は張り出して居る。西の方は、堀を境として居る故、別に言ふほどの事もないが、東南には、なか〳〵話の種が多い。

海軍大學校　白川樂翁の邸跡

木挽町には、天保以前は芝居があッた。又今の海軍大學校、海軍造兵廠等のある處は、松平越中守、即ち名高い白川樂翁の屋敷が有ッた。其の邸内に浴恩園といふ名園があッたので、今も昔の片影を保存して有る。谷文晁の

畫いた繪卷物を見ると、實に立派な庭園であッた。

西本願寺別院

此の邸跡の北に西本願寺別院がある。此處に酒井抱一上人の墓がある。上人は酒井雅樂頭の次男で、姫路の城主とも仰がるべき人でありッたが、十數萬石の領地を慕はず、一生を美の神に捧げて了ッた。

月島　石川島　佃島

扨この本願寺よりも海に近い處に、勝閘の渡がある。この渡は、明治三十八九年、日露戰爭當時から出來たものであるが、此の渡しで月島へ渡る。江戸の昔は、月島はなく、石川島と佃島だけであッた。佃島は江戸創業の頃より、攝州佃村の漁民が移住した所で、此處に住吉神社が鎭座して有る。石川

島は石川某が、享保年間に八代將軍吉宗に獻言して、寄場を造ッた所である。今の懲役人即ち囚徒を收容して、仕事をやらせた所であッた。實に早くより、遠見を以て、良法を案出したものである。今は佃島にせよ、石川島にせよ、昔の俤はなく、規則正しき町となり、紳士豪商の別邸を見るに至ッた。此の先數十年の後には、月島の先に、又新月島が出來、今の東京は、東京灣内に膨脹發展して行くことであらう。發展膨脹眞に喜ぶ可きであるが、悲しい事は、海苔が古昔の淺草から、段々と沖へ出て、今は大森でも、不作の年が多い。恐らくは遂に東京灣内では、出來なくなるかも知れない。芭蕉が『白魚にあたひあるこそ怨みなれ』と、その漁夫の網に罹るを悲んだ白魚も、隅田川では漁れず、三叉でも漁れず、佃島邊でさへ、少なくなッた。或る動物學者は、恐らく種が盡きるのであらうと心配して居る。其の他、江戸前の鰻、小魚、蜆、蛤、バカ、皆追々滅ッて行くやうである。船舶の往

來の繁多になッたのと、諸製造場から流れ出す、器械用の油、藥液などの爲めに害せらるゝのである。一方がよければ一方が惡い、文明もなか〳〵に考へものである。

明石町　淺野内匠頭の屋敷
明治初年の米國公使館

月島と相對して居る町は、明石町、此の邊は、明治の初め、外國人の居留地で、東京には珍らしい西洋造りが建ち並んだ處であッた。米國の公使館などは、長いこと此の海岸にあッた。江戸の昔はと云へば、此のあたりは、一帶に大名屋敷で、元祿の頃は淺野内匠頭の屋敷も在ッた。變れば變るものでないか。大石良雄、堀部安兵衛、大高源吾、なんといふ義勇兼備の淺野の武士が、朝夕、この海岸を歩いたかと思ふと、何となく昔ゆかしくなる。特に

小野寺重内は歌を詠み、大高源吾は俳諧の名人であッたから、房總の遠山より、江戸灣の汀に至るまで、常に三十一文字や十七字の詩題となッたことであらう。

奥平大膳太夫の邸跡
福澤先生『西洋案内』著述の長屋

此の明石町に、耶蘇敎の學校で、立敎大學と云ふがある。此の敷地の近傍に江戸時代に奥平大膳太夫の屋敷があッたのだ。此處に福澤先生が、小さな長屋に居られて『西洋案内』、『西洋事情』などを出版された。明治の初まりには どんな英雄豪傑でも學者でも、此の二書を机の上に置かなければ、世間へ出て、人並の話が出來ぬと云ッた位、素敵な勢力であッた。其の時分に、米國から始めて、乳母車が來た。僕も少年の時分に一見して、實に立派だと思ッ

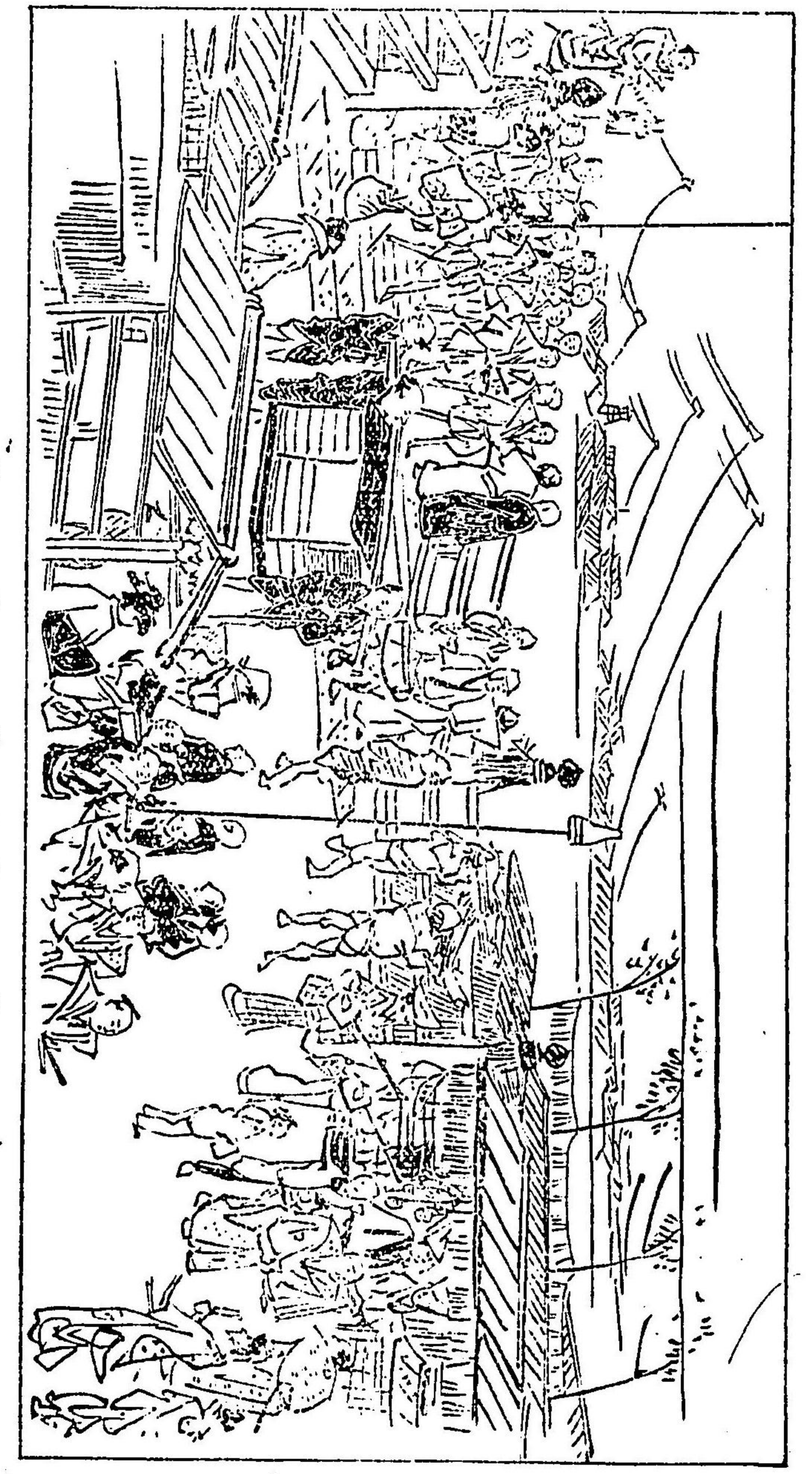
た其の車が、後に人力車の發明の參考になッたさうである。

紀國屋文左衛門の本宅

河村瑞軒の屋敷跡　楓川

尾崎紅葉の誕生地

京橋區には、まだなか〳〵面白い所が多い。本八町堀一丁目は、『沖の暗いのに白帆が見える、あれは紀の國蜜柑船』なぞと歌はれた、紀國屋文左衛門の本宅の在ッた所である。南新堀町一丁目は、昔の大土木家河村瑞軒の屋敷跡ださうだ。又、風流の名であるに似ず、世間で餘り知らないのは楓川である。これは八町堀を流れる川で、舊城内の紅葉山より、此の川が流れる爲めに、此の名が出たとのことだ。明治小説家の泰斗尾崎氏が紅葉と號したのも、素と〳〵此の邊に生立ッたからである。



中橋廣小路と云ふ所がある、今の人はこれも一寸氣が付かずに居る樣だが、昔はなか〳〵賑かな所であッた。又京橋の側に、竹河岸と云ふ所がある。竹屋が澤山に集ッた所で、今でも、一二軒は殘ッて居る樣だが、昔は竹藪の樣であッた。此邊に火事でもあると、此の竹に火がつく。其れがポン〳〵割れる音は、まるで南京町の爆竹を聞く樣で、實に壯快なものであッた。廣重や北齋の繪には能くあるが、昔は江戸の市中を、物干竿なんどの竹を賣ッて歩くに、其の竹を肩に載せ、恰も竹の長きが如く、賣り聲をも長くして、竹やー竹ーと賣ッて歩いた。昔の江戸市中には、種々の行商が多かッた。

國名前の町々

京橋區には、國名の町が多い。尾張町、加賀町、因幡町、山城町と、のべつに、國名前を有ッて居る。これは昔、此等の國々の大名が、各〳〵人夫を出

して、其の町々を改め造ッたのに因んで出來た名だと云ふ說が、眞實らしい。尾張町などは、知らない者はないが、因幡町などは人の知らない町名である。此の外に八官町、安針町と云ふ名もある。これは、支那人の住ッた所、又は和蘭人の居た所である。

風流の稱呼

稱呼で風流に聞えるのは、金六町の白魚屋敷。此の白魚屋敷は、前に話した佃島邊で白魚を漁る獵師などを支配した役所の有ッた所だ。それで白魚河岸と云ふ所もある。今では白魚と云ッても、餘り洒落れて聞えぬが、昔は隨分、意氣な話の中に出て來たもので、女の指でも其の白く細やかなのを評して、まるで白魚の樣だと褒めたものである。今では、そんな細い指をして居るやうでは、迚も活動は出來ませんからねと、女學生などは言ふであらう。

新富町、一時は京都の島原

此の白魚屋敷のあたりから、南の方へ行くと、新富町へ出る。新富町は明治以後の町名で、昔は一圓武家屋敷であッた。それが一時、島原と云ふ京都の遊廓の名を移して、遊里になッたこともある。それが又一轉して、眞面目な町となり、新富座が出來る樣になッた。今では帝國劇場あり歌舞伎座ありで、新富座は第三流の劇場となッたが、あんな建物でも、初めて出來た時分には東京人の膽を奪ッたものである。明治十二年の頃か、米國の前大統領グラント夫婦が來た時に、西洋では國賓に演劇を見せるが例であるから、一つ日本でも見せなければなるまいと云ふことで、サァどこの演劇が宜からうと穿鑿しても、是れぞと云ふ程のものが何處にも無い、トゞのつまりが新富座の演劇を見せる事となッた。其の時は、棧敷から高土間、ありとあらゆる柱

をば、縮緬や緞子で包んで了ッた。そして、故人團十郎が、勸進帳を演じたのである。當時未だ、電燈は無し瓦斯は無し、休息所も無ければ、食堂も無い、土間の客など〻來ては、夏は肌ぬぎの儘、酒を飲みながら演劇を見ると云ふ樣なわけで、今日の帝國劇場に比較すれば、まるで別人種の別世界の事のやうであッた。京橋區は先づ此の位にして置いて、次は日本橋區の方に移らう。

日本橋區

日本橋

扨、日本橋區の日本橋まで來た。此の橋は啻に東京の中心たるのみならず、日本全國、田舍の隅々までも知らぬ者はない。殊に昨年改築落成して、美々しい石橋となッた。何しろ昔からの人氣橋であるから、此の橋の由來を委しく話すことにしやう。

日本橋の起原

近頃まで、續いて附いて居た日本橋の擬寶珠には萬治元年戊戌九月とあッたが、これは此の橋の起原ではなくて、此の橋の始めて架設されたのは萬

治より五十六年程前、慶長八年癸卯である。橋の敷板の長さが三十七間四尺五寸、幅は四間三尺五寸、其の頃は河の幅も廣かッたので、兩方から石垣を築き出して架けたと云ふことである。

此の橋の下の河は其の頃餘程廣くもあり、清かッたと見えて、德川三代の將軍家光のまだ若殿樣の時分に、此の橋の下で水泳をしたと云ふ話がある。尤も其の時分の日本橋の地理を考へて見ると、今の樣な市の眞中ではなくて、一寸まア今日の永代橋のあたりの景色の樣だッたと思ッたならば適當であらう。

當時の地勢

慶長の江戸繪圖を見ると、今の和田倉門あたりから一石橋まで、幅の廣い河で、呉服橋が淺草口橋と書いてある。昨年頃馬場先邊の土工をして居るのを見たが、一面に松丸太が打込んであッた。松丸太を打込んで、やッと地形をした位なので、今の芝浦の埋立地の樣な處であッたらしい。今日の京橋區一圓、日本橋區も多くは蘆荻の生ひ茂ッて居ッた所で、最早日比谷邊で漁師が網を干して居ることは止んで居たにせよ、先づ大體そんな樣な地勢であッた。

當時の天下

此の慶長八年は、德川家康が征夷大將軍に成ッた年で、浮田秀家が八丈島に流され、關ヶ原の亂が終ッてから三年の後である。日本の大勢は此の時全く家康の手に歸して了ッたのである。

大阪の秀頼が内大臣となり、後には關白となッて德川氏の上に權威を占めやうと考へたが、家康が征夷大將軍となッては、最早その事も行はれず、こ

れを今日の形勢に比較て見るならば、恰度、我が國との併合前に於ける朝鮮の李王殿下の境遇と同樣である。今日は日本の勢威が、日に月に勃興して行く時であるが、慶長八年は德川氏が旭日昇天の勢で天下を掌握した時である。一寸茲で當時の歐洲の形勢を言ふと、英國のゼームス一世が、スコットランドを合併して、合同王國即ち大英國に基礎を建てた時である。

一里塚の元標

此の橋の出來た翌年、即ち慶長九年には德川氏が、三十六町を一里と定めて、所謂一里塚の元標を立てた。そして其元標は此の日本橋なのである。

一里塚は、東海道に先づ設けたもので、役人が家康に何の木を目標に植るませうかと伺ッた。すると、エー木を植るろと言はれた。エー木を聞きまちがへて、榎木を植るたと云ふ傳說であるが、兎に角、榎木は早く大きくなるものであるから間違ッたにせよ、エー譯である。

然し路標の塚と云ふものは鎌倉時代にもあッたものらしいが、三百年間、日本中の往來の便利を與へたのは、此の慶長の九年からである。兎に角記念すべき價値ある事である。こゝで一寸一里塚の事を言ッて置くが、正確なる一里塚の跡は、塚は無いが、本郷駒込追分町の、高崎屋の店先と、王子へ行く通りの西ケ原の一里塚である。こゝには今も其の榎木がある。

日本橋の高札

此の橋の邊には高札と云ふものがあッて、忠孝の勤むべきことを敎へ、今の敎育勅語の雛形の樣なものを掲げたのであッた。また或る高札に斯う云ふことが書いてあッた。

定

江戸より駄賃幷に人足賃錢

一、品川まで

荷物一駄　九十四文

乘懸荷人共　同斷

から尻馬壹匹　六十一文

附、あぶつけはから尻に同じ

それより重き荷物は、本駄賃と同じかるべし

人足一人　六十一文

とあり。これより以下、千住、川口、板橋、上高井戸、下高井戸への賃錢及び泊々にての木賃錢等を書いて、最後に

右之通可レ取レ之、若於二相違一可レ爲二曲事一者也

享保三年十月日　奉行

と書かれてあッた。なか〳〵行き屆いたものと思はれる。

橋邊の晒者

可厭な事ではあるが、晒者と云ふ事があッて、罪ある者が一定の期日間、往來の人に其の顏を晒させられたものである。何しろ日本橋は吉凶禍福共に社會のあらゆる者を集めた中心であッた。

日本橋と白木屋

通り一町目の白木屋の主人は、寛文の昔、江戸へ出て商賣を始めた時に、親類の三輪執齋と約束して、これから君が三年の後に身を立てたらば、日本橋の眞中へ來い、僕も亦商賣で身を立てたらば、日本橋の眞中で會はうと、懇ろに二年の後の時日を約束した。其れから、白木屋――大村彦太郎は、一

生懸命に商賣を始めた。一體白木屋の名は、吳服屋には一寸緣がない樣であるが、成る程白木屋の主人は、始めに材木屋をしたのださうだ。それが後に吳服屋をやッて大變に當り、今の盛大な店となッたのだと云ふことである。扨、大村彥太郎、三輪執齋の二人が、前年の約束を守り、三年の後に、時日も違へず、日本橋の眞中に遣ッて來た。もう其の時には、三輪も學者として稍世に知られ、白木屋の主人も立派な商人として世に知られたのである。そこで右の二人は、兎に角共に打喜び、先づお互にこれ迄に身を立てた、然し是れ丈けでは如何にも滿足が出來ぬから、更にもう一段勇猛精進、向上發展せねばならぬ、と云ふので、また三年の後の時日を約束した。昔は日本橋の上に電車も通はず、一錢五厘の葉書もなし、同じ江戸でも交通頗る不便であッたから、三年の間は互に無沙汰で過ぎ、やがて三年後の約束の時日になると、兩方約束の通り、又此の橋の上で出會ッた。此の時三輪執齋は、刀を帶

した侍を供に連れ、若黨、草履取を從へ、槍を立てさせて來た。白木屋の主人大村彥太郎は支配人、番頭、若い者、小僧を連れて來た。そこで互に大に喜んで話をし、これでまア二人共兎に角成功して、男一匹の顏が立ッたと、祝し合うたさうだ。今日の社會狀態で言ふならば、三輪執齋は帝國大學の教授となり、白木屋の主人は百萬圓の大分限と成ッた樣なわけである。何と目出度い話ではあるまいか。明治の今日にも、友人間で斯うした約束をして其の職業に專心し、向上精進の勇氣を揮ひ、斯くの如く立派に約束を實行する人があッたら、今日の日本橋も、其れが石造となッた以上の光榮を現はすであらう。

日本橋の架け替へ

日本橋は、慶長の昔から度々架け替へて居る。昨年出來上ッたのが、十二

度目の橋であッて、此の間の架け替へを調べて見ると、

元和四年　萬治二年
元祿十三年　正徳二年
寶暦十三年　安永二年
寛政八年　文化二年
萬延元年　明治五年

以上の十回である。前にも言ッた通り、擬寶珠は萬治年間のが明治まで傳はッて來た。惜しい事には、今は其の擬寶珠の行方が分らぬが、風の音信に依ると、其の擬寶珠を何處やらで、倒にして手あぶりにして居るとか、植木鉢にして居るとか云ふ話であるが、こんな物は成るべく記念として、博物館あたりに保存して置きたいものである。慶長の架橋から懸け替へ毎に段々變遷して、一番最後の明治五年の木橋は、長さ二十八間、幅七間七分、慶長の頃

に較べると河幅が餘程狹くなり、從ッて橋の長さも縮まッたが、幅だけは廣くなッて居る。人家が稠密になるに連れて河幅も自づと狹まり、そして往來の人が益〻增加して來たと云ふ事は、此の橋の變遷に徵しても明かに知ることが出來る。また以前人が田舍から東京へ出て來て、一番失望したのは此の日本橋であッたさうだ。日本橋と云ふから、どんな大きな橋であるかと想像して來て見ると、まことに見すぼらしい木の橋であッたからだ。昨年からは兎に角可也立派な橋だと見るやうになッたであらう。然し其の木橋も、江戸時代には非常に有難かッたものである。有難かッたと言ふと、今の人には分らなからうが、明治以前の人は、道路の善くなるも、橋が架けられるのも、皆君德と思ッて、感謝したものである。永代橋が架ッた時に、芭蕉が

ありがたや頂いて踏む橋の霜

と詠んだことがある。橋の架かッたのは、吾々の納める營業稅や所得稅で造

ッたのであるから、不足は言ふとも、有難いことは露程も無いなぞと云ふ考は、昔の人には一人もなかッたのである。何と美しい人情ではないか。

有名な深草の元政上人が、萬治年間に日本橋を渡ッて作ッた詩がある。それを誦むと、自づと當時の樣子がわかる。其の詩に曰く、

黄昏に日本橋のもとにつく、二階なるところに月を見て、

日本橋頭日本秋　更無一事挂心頭
今宵新見江上月　影滿扶桑六十州。

此の深草の元政は、彦根の井伊家の藩士で、若い時から日蓮宗を信仰して、清僧と仰がれた人である。今序だから一寸此の人の話をしやうが、萬治高尾の情夫の石井常右衞門の後身が深草の元政だと云ふ說があるが、此の種の傳說には訛傳が多いので困る。萬治高尾の盛時には、元政は既に一代の清僧と仰がれて、身延詣での歸りに、坊主頭を振り立てゝ、江戸へやッて來たので

ある。高尾が如何に物好きでも、又元政が如何に美男であッたにもせよ、こんな坊さんと遊女の間に情事の起らう筈が無い。

日本橋と魚市場

扨、日本橋にどうしても附いたものは例の魚市場である。今は西洋料理なぞ云ふものが出來て、段々異人臭いことが流行るが、どうも日本人の腹には、鯛や比目魚でなければ蟲が言ふことを聽かない。特に江戸ッ子の好物には、初松魚と云ふやつがあるので、苟くも江戸ッ子で候といふ以上、褞袍を殺しても此の初松魚は食はずんばあるべからずと云ふわけで、其の結果、

初松魚嫌簞笥の錠をしめ

と云ふ川柳さへある位である。

松魚を賞玩したのは、元祿の昔からであるが、山葵醬油で食ッたのは、時

代が新しい樣である。昔はスリ生薑と芥子酢であッた。矢張り京都式であらうと思ふ。

漁船に對する江戸趣味

往時、鎌倉の方から來る漁船の、まだ日本橋に入らないうち、其の漁船を沖合に待ッて居て、無言で小判を一枚ほうり込むと、船頭も無言で松魚を此方の船へ抛り込み、側目も觸らず無二無三に日本橋へ漕ぎ入れたものであるさうな。其の小判松魚は、實は舌で食ふのぢやなくて、目と耳と腦との趣味で食ふのであらうが、兎に角えらい事である。江戸ッ子の言語で言ふと、ゴウセイなものである。後には小判でなくて、酒樽をほうり込んだものだと云ふことであるが、何れにしろ是れなどは純粹の江戸趣味の發現であッて、なか〳〵面白い。抱一の句に、

魚の脊に鎌倉山の青みかな

といふのがある、言ふまでもなく初松魚の句である。又八百膳で詠んだ句に

行く春の袋比目魚や餅がつを

といふのがある。餅がつをの句は別として、鎌倉山の青みと詠んだ手ぎはは、專門の俳人の及ばないところがある。此の鎌倉山の青みから聯想すると、ハケ先を曲げて、月代が青々と涼しげに、苦味ばしッた顏の男が、盲の腹掛で、二の腕に文身の端を少し見せたイナセの姿が目に浮ぶ。芭蕉の句にも、

鎌倉を生きて出けん初松魚

といふのがあるが、抱一の鎌倉山の青みの方が、迥かによいやうである。山口素堂の

目に青葉山ほとゝぎす初松魚

といふのも、江戸趣味を歌ッた佳句であるが、松魚の句としては、矢張り抱

一のを第一に推さねばなるまい。

寺門靜軒の江戸繁昌記

靜軒の江戸繁昌記に、

三日肉食せざれば骨皆離る。

と言ッた其の魚肉は、日本橋の魚市場から運び出されて江戸ッ子の腹に葬らるゝのである。日本橋小田原町（魚河岸のあるところ）の犬は、毎日魚肉を食ふので、毛は拔けるが、身體は圓々と太ッて居た。そこで靜軒が、

犬儒にあらざるよりは、常に群肉を食ふことを得ず、人儒は骨皆離る、憐むべき哉。

と罵倒したが、今も昔に變らず、肉を食はうと思ふと、少々ワン〳〵の眞似をして、お預けだのチン〳〵だのと、尾を振ッて哀願しなければ、好い肉に

はありつけない。肉どころか、パンにさへありつけぬ。或る人が佐久間象山に富を致す方法を質いた時に、片足をあげて小便せよと答へたさうだが、何れ人儒と言はれ眞正の學者として世に立つには、貧乏して腹の空るのを、覺悟の前でかゝらねばならぬものと見える。

魚市場を保存したい

そこで此の魚市場は何時頃から出來たものかと言ふと、面白い事には、日本橋と同じく慶長年間から開かれたものだ。爾來三百年、江戸が東京と變遷ッても、依然たる氣負ひの本場であッたのだが、此の魚市場も、近來は移轉問題が喧しく、早晩取り拂はれるらしいが、魚のことなれば生臭きは已むを得ない次第、そんな事は少々位閉口であッても、江戸ッ兒氣質から言ふと、こんな所は矢張り今の儘存在させて置きたい氣がする。衛生だとか、何だと

かの、小理窟からのみ議論せずとも、日本橋のほとりで鯛が跳ねたり、鮒魚が這ひ出したり、天麩羅屋が立食ひの客に舌鼓を鳴らさせたり、鮨屋がポッケットの錢を皆はたかせたりするやうな風俗をば、明治の百年まで續かせて置くのも可からうではないか。

日本橋の名稱起原

日本橋といふ名稱は、誰が何ういふ理由で附けたかと言ふに、昔から今に至るまで、一向に確かな考證は無い。唯どの書物にも、此の橋が架かッた時に、日本國中の人が、集まッて架けたのだから、それで誰言ふとなく、日本橋と言ひ初めたのだと傳へてをる。此の說果して、眞か僞か、固より判明はしないが、成る程前にも言ッた通り、慶長八年は、德川氏が旭日昇天の勢威で、日本國中の政權を握ッた時であるから、全國の人氣は自然と江戸に集中して、一も江戸二も江戸と言ッたのである。此の時の日本橋は、實に日本全國の人の注意を集めた江戸の眞中の橋である。丁度日露戰爭後の日本が、海外へ武名を轟かし、世界中の談柄が、悉く日本に集中したのと同じ樣な有樣であッた。しかも此の日本橋の西には、日本一、否世界一の、富士山が聳えて居る。山崎宗鑑が、

元日の見るものにせん不二の山

と詠み、又橘千蔭が、

富士の根も麓につゞくむらやまも
なべて綠にかすむ春かな

と詠んだのも、實に此の日本一の景色である。

あらめ橋　おやぢ橋

扨、此の日本橋の流に沿うて行くと、「あらめ」橋があり、「おやぢ」橋がある。「おやぢ」橋には、吉原遊廓の元祖の庄司に關係して、面白い話があるが、其れは吉原の話の方に讓ッておかう。明治五六年頃、征韓論の盛んな時分に、有名な「おやぢ橋事件」の有ッたのは、此處である。日本橋が、あの通りの新石橋と成ッた世だから、此等の橋も、後には立派な橋となるであらうが、橋の名だけは、長く存して置きたいものである。

第一銀行　牧野家の屋敷

兜町　鎧橋の因由

扨、此の邊より、小網町の方に行くと、第一銀行が橋頭に聳えて居る。此の銀行の所在地は、牧野と云ふ大名の屋敷跡で、昔は其の庭が名高いものであッた。特に兜町と云ふ町の名は、明治になッてから附けられたので、此の

庭内に、兜を埋めた塚が在ッたのが元となり、斯くは呼ばるゝに至ッたのである。此の兜は、源義家が奥州から歸ッて來た時のものだとも云ひ、藤原秀郷が、將門の頭と一緒に持ッて來た兜だとも云ふ、何れが眞なるやは、固より判明しない。

鎧橋の鎧の名も亦、源義家が、此處を渡る時に、大風が吹いて來たので、鎧を投げ込んで、漸く舟が岸に着いたと云ふ、言ひ傳へもある。兜塚の跡は今は兜神社となッて居る。此の牧野氏、昔は海賊牧野と云ッたもので、こゝの橋も亦、海運橋でなくして海賊橋と云ッたものである。此の橋の側に、ずッと昔、向井將監と云ッた旗本の屋敷が在ッたが、此の向井は、今の九鬼子爵の先祖などと同じ樣に、德川氏の始め、舟手の大將であッた。先づ今ならば、海軍大臣とか、艦隊司令官とか云ふ可き役目である。足利以來、日本人が支那の沿岸を荒し、日本の海賊と云へば、名高いものであッた。九鬼氏と

向井氏は、此の海賊を鎮撫する役目であッたので、海賊方と云はれたものである。海運橋が初め海賊橋と云はれたのは、其の向井の屋敷が此處に在ッたからである。此の邊が古昔海に近かッた事もそれで分る。鎧橋も明治以前には、船渡しであッた。第一銀行の邊は、大樹鬱蒼として、今の景況とはまるで別物であッた。第一銀行の出來た時分は、お寺の本堂を西洋造りにした樣な、御城の櫓とお寺の屋根とを合併した樣な、一種奇妙な建築であッたが、それでも東京の人々の目を驚かしたものである。今のを其れに較ぶれば、實に堂々たる文明的の建築である。其の時分には、銀行と云ふものは何商賣であるやら、知らない人が多かッたので、或る老婆が第一銀行の前に立ッてお賽錢をあげた話は、名高いものである。勿論、第一銀行の立ッた頃には、まだ〳〵兜町や、蠣殼町の取引所が、やッと出來たか出來ないかの頃で、あの邊一帶、今日の樣な盛況は、夢にも想ひがけなかッたのである。

茅場町の藥師　其角の住居

此の兜町の株式取引所の近くに、有名な茅場町の藥師がある。此の藥師も隨分古いものだ。俳人其角が、此の邊に住んで居ッた事は、同人の書いたものを見ても確かである。其の當時は、元結こきが春の日向に、睡むさうな音をさせて居るばかりで、あとは若草の萠えてる物靜かな景色であッた。

梅が香や隣は荻生惣右衞門

と云ふ句は、有名なものであるが、それが其角の句だと傳へられたのは誤りに相違ないけれども、こゝらあたりに大儒徂徠が住んで居ッた事も確かである。徂徠先生の號は、茅場町の茅に因んで、護園と稱した。其の家の在ッた處は今の坂本公園の脇で、坂本町二丁目七十幾番地かに當るらしい。然し東京見物の人は、まア こんな研究的の事は止めて、茅場町の電車乘換への邊で

は、其角の昔を偲び、坂本公園あたりの河岸を歩いては、徂徠の高風を慕ふといふ樣にしたら面白からう。何に致せ、毎日毎日買ふの賣るのと、相場師が、仲買店と取引所の間を、血眼になッて奔走する、自働車が走れば、電車も通る、今は實に物恐ろしき景色であるのに、過ぎし昔は、一代の大儒たる漢學者や高く俗を脱した俳諧師が、此のあたりに居ッたと云ふことは、誠に面白いことである。此の茅場町より大川の方へ行くと、又種々な名所がある。中々電車では、廻り切れまいから、東京地圖を廣げて見るが宜しからう。

永代橋　三叉　高尾の斬られた場所

永代橋の側に、三叉と云ふ所がある。川の流が三つに分れて、一と筋は隅田川、一と筋は永代橋の方へ、一と筋は靈岸島の方へ入る。其れ故そこを三叉と云ふのである。此の三叉と云ふ所で、仙臺の殿樣伊達綱村が、舟中にて

名妓高尾を吊し斬りにしたと云ふ、名高い場所であるが、然し大槻文彦博士の著書で見ると、伊達騷動なるものは、全く小說的談話であッて、實話ではないさうだ。けれども、伊達騷動と云へば忠臣藏にも劣らぬ名高い戲曲で、殊に妙なのは、永代橋の側に、高尾稻荷といふがあッて、高尾の死骸を埋めた所だと傳へて居る。其れは全くは他の溺死女を埋めたのださうで、何も伊達騷動に關係があるのではないが、今は殆んど事實らしく傳へられて居る。兎に角高尾は遊女ではあるが、情人に心中立てして、仙臺侯の意に從はぬ、そこで此方も意地づく、千兩箱で、言ふことを聽かぬ女の身の重さを計ッて、すッぱり身受けしてしまッた。しかも其の黃金を積んで贖ッた高尾を、一刀の下に川の中へ斬り沈めたと云ふのであるから、話が如何にも奇拔である。よしや假作の戲曲として考へても、三叉の江上を眺め、數掬の涙を美人高尾の爲めに灑がざるを得まい。

堺町　葺屋町

堺町、葺屋町は、昔、演劇のあッた所で、町名を聞けば直ぐ、演劇を聯想する。京橋區の木挽町にも、昔演劇があッた。今では有樂座とか、帝國座とか、其の座の名前は誰も知ッて居ても、町名の方は餘り知ッてる人はない。明治以後は、日本橋區に水天宮が移ッて來て、蠣殼町の水天宮と云へば、東京名所の一つになッたが、此の邊などは、昔は皆屋敷町で、今の景色とは全く違ッた所であッた。こゝから濱町の方へ出ると、久松町一丁目に山伏井戸と云ふのがあッた。其處は今は道路となッて、既に其の所在を失ッた。此の近所に有名なる加茂眞淵の、縣居といふ建物があッたのであるが、今は山伏井戸と共に、全く其の所在は不明である。然し國學の三大家の一人眞淵の住所がこゝらに在ッたかと思へば、何となく床しく感ぜざるを得ない。今は此

のあたりは、電車が通じ、日本橋倶樂部があり、大常磐、小常磐なぞと云ふ、盛んな割烹店があり、妖艶めいた美人が、往來をする樣になッて居るが、眞淵の家集に、九月十日縣居にてとして、

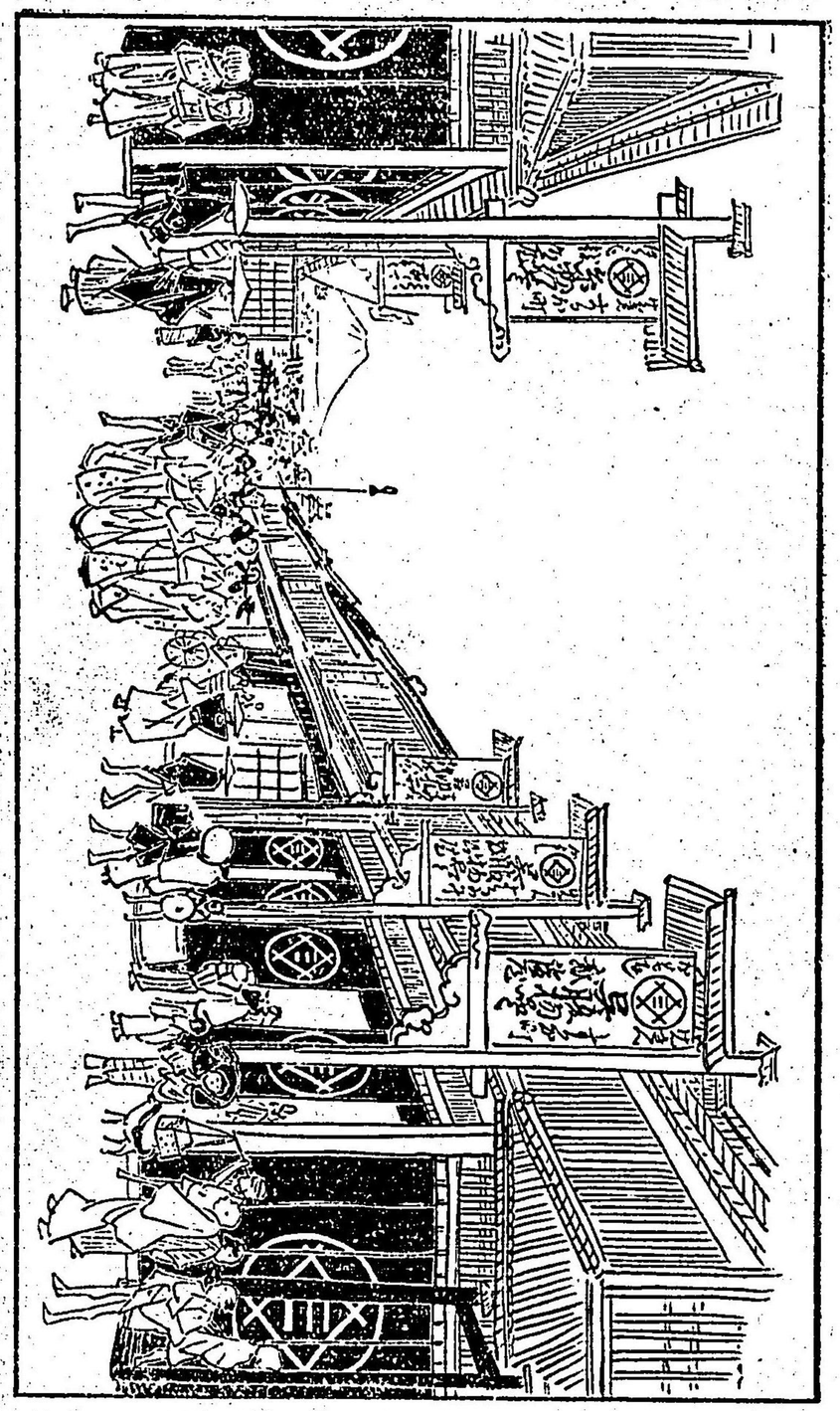
こほろぎのなくやあがたの我が宿に
　月かげきよしとふ人もがな

あがた居のちふのつゆ原かきわけて
　月見に來つる都人かも

と詠んである。此の歌なぞを見ると、さても都の有樣が變ッたものであると思ふ。現今人の酒肉を恣にする右の場所が、寛政の昔は、露原をかきわけて、都人に月見に來よと云ッたのである。殆んど夢かと疑はるゝばかりの變遷である。

三越呉服店　昔の越後屋

更に、ずッと立ち戻ッて、日本橋區の中央に來て見れば、星移り物變るで、此の邊の變化、是れ亦夢の樣である。十間棚の雛市、近頃は年々歳々に盛大となるが、殊に三越なぞも盛に雛を賣り出す、其のお客も亦、恰も町の甚だしく變化したと同樣に、態度風俗まるきり變ッて、廂髪やら、リボンやら、コート姿の夫人が、ハイカラ紳士と手に手を取ッて買物に行くと云ふ有樣。此の三越は昔越後屋と云ッて、矢張り盛んな呉服屋であッたが、江戸名所圖會なぞを見ると、百年前の景況が直ぐ分る。唯變らぬものは、駿河町から見る駿河の富士ばかりである。昔の越後屋の店と今の三越とは、建築の比較では、さながら宮殿樓閣と賤が伏せ屋とでも云ふ程の相違である。昔春の日永の時分に、お客が越後屋へ買物に行くと、先づ番頭が悠暢な聲で小僧を呼ぶ。小



僧が奥藏から反物を運び出す。やがて算盤をパチ〳〵やりながらお客と談判をする。客は身丈よりも高いばかりに反物を積み重ねさせて、あれのこれのと選り好みに果しなく、斯くて小半日も費して、何十兩かの買物をしたからと云ふわけで、今度は越後屋で晝飯を饗げると云ふ暢氣さ、客も亦然らばと座敷へ通ッて、歸りには呉服屋の店さきから千鳥足で出て行くと云ふ太平無事の有樣、これを今日の三越の店と較べたらどうであらう、持主は昔も今も變りなく、益々繁昌しては行くが、若し今日の店の模樣を、昔の番頭が突然やッて來て見たならば、恐らくは驚いて氣絶でもするであらう。

日本銀行　本石町の時の鐘

日本銀行のあたりは、昔の銀座の後藤が居ッた所で、同じ金に緣故のあるのが妙だ。

又其の隣の本石町には、有名な時の鐘があッて、明治までは鳴らして居たものである。今は其の鐘の行方すら知れぬが、在ッた場所は三丁目の新道であッた。これから東の方へ行くと、江戸橋、堀留、傳馬町、馬喰町、大門通り、何れも目貫の場所である。昔は日本橋の左右から北へ、淺草邊までが、町の中央で、日本橋區、神田區などは、例の江戸ッ子と云ふ職人の往來する所、所謂神田上水で洗ひあげた勇み肌の兄いの居た處だ。芝、麹町、下谷、淺草、本郷なぞは、先づ片田舍の方で、殆んど其の三分の二以上は、武家屋敷に割り當てられたものである。それが今は段々と西に中心が移り、舊の大名小路。今の帝國劇場の邊から、東京府廳、三菱の原、延いて銀座通りの方角などが、先づ東京の中央と云ふ勢に變じた。それでも日本橋區は、中々他へ江戸ッ子の實權を讓りはせぬ。財産でも、地價でも、營業祝でも、東京市内では、第一に指を日本橋區に折らねばならぬ。

舊吉原

元祿の昔、其角が、

鐘一つ賣れぬ日はなし江戸の春

と讀んだのは、田所町、彌生町の間から、神田へ出る通りで、昔の吉原の大門口であッたと云ふ。其の頃の吉原は、今の新泉町、高砂町、住吉町、浪花町なぞが、一廓を造り、庄司甚右衞門と云ふ男が支配をして居ッた。慶長元和の頃、此の邊は全くの葭原で、極めて低い土地であッたが、そこを埋め立てゝ遊廓としたのである。後に葭を吉に改めて、吉原と呼ぶことになッた。

其の當時、遊冶郎が此の吉原に行くのは、今の料理屋、待合、乃至は溫泉を客引の看板にする料理屋なぞに出掛ける樣なもので、勿論風俗の爲めに惡い事だが、其の頃の社會道德の程度から言へば、先づ免して置くべきもので、

あッたらう。

江戸の開け初めに、時の役人が、淫風甚だしく、驕奢日に盛んなるを憂へて、家康に傾城町禁止の策を獻言したことがある。然るに家康は、諸國の武士どもが、江戸へ來て鬱を散じ、氣を養ふ爲めであるから、放ッておけと言はれたさうだ。尤も其の頃の娼家は一廓ではなく、處々に散らばッて居ッたのだ。そこで庄司が遊廓の設計をやり、到頭自分一人で大儲けをして了ッたが、昔にしては餘程の事業家と言ッても可からう。

此の日本橋區の吉原が、明暦の大火後、淺草に移ッたのである。江戸即ち德川時代の風俗、趣味、人情を知らうと思ふならば、吉原の歴史は、決して閑却してはならぬもの、十分研究の價値あるものであらうと思ふ。然しマア そんなに固くなるのは止して、軟い話をするならば、慶長、元和、寛永頃の嫖客は、先づ風呂へ入るにしても、湯女に身體を洗はせる、髪を洗はせる、

長煙管など下僕に擔がせ、小唄で長刀の落し佩し、大道狹しと歩くなどは、今の所謂、ハイカラ中のハイカラであッたのだ。

吉原遊廓の事は、後に又話さうが、唯モウ一つ言ッて置くのは、此の古い吉原でも、淺草の新吉原でも、往昔は、大小名、旗本などの、立派な武士が多く遊んだものだと云ふことを忘れてはならぬ。今から其れを聞けば嘘らしくもあるが、後世の人が、今日の新聞雜誌に、所謂紳士達の待合入りが記いてあるのを讀んだなら、亦恐らくは嘘の樣に思ふであらう。こんな遊びに趣味もヘチマも要りはしないが、若し趣味の上より言ふならば、今の待合は、昔の遊廓に比して、甚だしく趣味が無い。江戸趣味なるものは、其の實多くは遊里から發達したので、此の點から見れば、今日の待合や料理店はとても、お話にならぬ。

江戸橋　マストドンの骨

さて江戸橋の話だが、此の橋は日本橋の南で、東京の眞中である。此の眞中の橋を、明治になッてから架け替へた時、マストドンの骨を堀り出した事がある。マストドンは前世界の巨獸だ。江戸の地にも、古い古い昔、數萬年の前には、象の樣な大きな獸が歩いて居たものと見える。然しそこ迄、江戸を研究するにも及ぶまい。

堀留

江戸橋の近くに、堀留と云ふ所がある。他所の人が聞けば何でもないが、これでも江戸ッ子が聞くと、堀留の名に一種の聯想が在ッて、大きな土藏、廣い店、多數の小僧、番頭手代、商品を山の樣に取り扱ひ、財界の覇權を握

ッて居る長者町が眼に浮ぶ。

一寸茲で、江戸商人のことを言ふが、前にも言ッた通り、中々昔の商人と云ふものは堅氣質なもので、番頭手代、小僧には羽織は着せず、地質まで質素なものに定めてあり、上下の分の至ッて正しいものであッた。

昔この日本橋あたりを往來した人の風俗は、どんなものであッたらうと考へるも亦一興であらう。

黑縮緬の羽織、仙臺平の袴、意氣な細身の大小を前半に佩し、雪駄の音もチャラ〳〵と、一文字の菅笠かぶり、懷中物で懷ふくらませ、少し反り身になッて行く。後から從僕が、股まで高く衣裾を折り、木刀一本佩して尾いて往く。これは先づ中等の武士。扨又夏の女姿はと言へば、上布の帷子に、黑繻子の前帶、塗下駄、髪はオバコで眉を拂ひ、涅齒をつけ、四十路あまりの年紀ながら、何處やらに垢ぬけのした女が、日傘片手に子供の手を引いて

行く。又は、紹の振袖に錦の帶、高島田、越後上布の帷子を着て、丸髷の下女に日傘をさゝせ、後から煽がせながら行く。或は小僧が魚籠の魚を鳶に取られて、恨めしさうに空を眺めて居る。大八車　車力が高荷を積んで、褌一つの素肌、エー〳〵聲で、大道を推して行く。電車で人を運び、自働車で荷物の運搬をする今日からは、とても想像のつかぬ位なもの。當時八百八町を心なしに駈け廻るものは、大位なもので、馬さへ町中を通るには、地道を踏ませて行ッたのだ。

傳馬町の牢屋

この日本橋の眞中に、一寸不似合なほど厭なものは、傳馬町の牢屋であッた。今は小傳馬町に、大師堂が出來て、淸淨の所となッたが、こゝが德川時代の牢屋の在ッた跡である。八代將軍吉宗が、或る時牢屋の樣子を知りたい

と思ひ、態々一人の者に罪を犯させて、素知らぬ振りして牢屋へ入れた。然て出獄してから、其の牢屋の模樣を御尋ねになッた。處で其の者が牢獄内のいと恐ろしき事を申し上げた。將軍が其れを聽かれて大層滿足せられたと云ふ話がある。何分昔は寛大な點は馬鹿に寛大であッたが、嚴格な處は又無茶に嚴格であッた。

明治になッてからの傳馬町の牢屋を、猩々曉齋が繪に書いたことがあるが、德川時代の牢屋と云ふものは、罪人が互に膝を抱いてギッシリと詰め合ッて坐ッて居ッたもので、まア罪のある電車の滿員と思へば似たものであらう。そんな風であるから、無論運動の時間はなし、壁は敷かれてあッたのだが、牢名主と稱へた古株の重罪人が、皆取りあげて、其れを積み重ねた處に自分獨で坐ッて居ッたものださうだ。斯かる鹽梅だから、牢に入ッたら最後、必ず熱病を患ひ、疥癬をかく、死かゝれば壓し殺されるし、惡まれれば締め殺

される。まア生きて居るだけの事である。こんな生き地獄が傳馬町に在ッたのだ。勿論武士分以上の者は入獄はせぬが、所謂平民階級の者のみ叩き込まれたのである。こんな生き地獄と、明治今日の監獄とを比ぶれば、今のは金殿玉樓と言ッても可い程であらう。

此の傳馬町から東の方へ行くと柳橋がある。南へ行くと箱崎がある。又少しく後戻りをして神田の方へ行くと富澤町がある。此の邊が一體に昔は屋敷町であッた。淺草橋のところは、ずッと古くは淺草門があり、櫓があッた、石垣もあッた。此んな事は今では誰も知ッて居らぬ。殊にあの邊は昔寺が多く、今の矢の倉の小學校に石の大きな箱があるが、大かた其の頃のお寺に屬したものではあるまいかと思はれる。

又富澤町の古着店といふものは名高いもので、例の江戸繁昌記などにも、其の店々の有樣が面白く書かれてある。

日本橋區は此の位で一先づ終り、これから神田區に移らう。

神田區

神田區は江戸ッ子の本場で、日本橋の哥兄とは言はないが、神田の哥兄とは誰も言ふ。殊に神田といふ名が中々古い名で、神田明神などは江戸名所の大關である。此の神田を、先づ須田町の電車乘換場所を初めとして見物をして行くと、此の區も亦歴史的興味の深い所である。

柳原　お玉ヶ池

柳原及びお玉ヶ池は、日本橋區に接近した處にあるが、此の柳原は昔、須田町の堀端からしてずッと淺草橋まで、土堤があッて柳が植ッて居た。當時江戸中に、柳の並木のあッたのは此處ばかりであッた。日本橋區の方で話をした富澤町も、區としては日本橋に入ッて居るが、實は柳原と一つに昔の人

は見て居た。此の柳原がまた古着屋の多い所で、柳原物と言へばイカサマ物であるといふことを聯想させる。今でも電車から氣を付けて見ると、柳原の御稲荷樣が殘ッて居る。柳も二三本は殘ッて居るが、其の堤の在ッた場所は皆赤い煉瓦家屋の長家となッて居る。お玉ヶ池は、今となッては、搜しに行ッても一寸わからない位で、殊に池は人の屋敷の中になッて、半分が裏屋の路次の衝當りになッて居るから、先づ無いも同樣である。然しお玉ヶ池には面白い歴史があッた。

それは、此の池のほとりに、お玉といふ女が居て、途行く人に、茶菓などを賣ッて居ッた。處がこゝに二人の男があッて、一人のお玉を、兩方で是非とも女房にしやうと言ひ出したので、お玉はどちらへ靡いてよいか分らなくなり、到頭池へ身を投げてしまッたといふ。今は此の池が、大かた埋ッて、松枝町邊となッて居る。今の不忍池よりも、もッと大きい池であッたらしい。

殊に此處には梁川星巖が居ッて、玉池吟社といふ、詩人の集會もあッた。

此處から少し後戻りすると筋違、昌平橋、今でも田舍の老人などは、須田町では却ッてわからないが、筋違と言へば寧ろわかるであらう。此處にも大きな城門があッたのだ。今の樣な雜沓した處ではない。廣瀨中佐の銅像から、駿河臺へ突き當る、あの邊からして、小川町、錦町、神保町、裏猿樂町皆屋敷町であッた。或る人が猿樂町に居たが、晝も狐が出ると言ッて恐しがッたといふ話がある。神田の通りに現今電信柱の太いのが立ッて居る樣に、昔時此の邊には一體に大きな樹木が生ひ茂ッて居たのだ。

それから續いて護持院ヶ原といふ所があッたが、此處は將軍が鷹狩をされたといふ話もある。その護持院ヶ原は、一番二番と續いて廣い松林であッたのだ。それが今では、外國語學校だの高等商業學校だの女子職業學校だのといふ立派な學校が幾つも建ッて居る。實に變れば易るものだ。元祿時代には

此の原に、護持院といふ大寺があッて、御經を誦んだり鐘を叩いたりしたのである。今の雜沓な神田の眞中に、斯かる靜かな所もあッたかと思ふと、何となく不思議な位に思はれる。尤も今でも、ニコライの會堂で喧ましく鐘を撞くが、護持院の鐘を想像し來れば、今の鐘は大分調子はづれである樣に感ぜらるゝ。

神田明神

神田明神は、今も昔と些かも變りは無いが、境内はまるで變ッてしまッた。明神樣の前が舊聖堂、今は電車で屋根だけが見える。聖堂と並んで女子高等師範學校がある。あそこが昔は學問所といッて、漢學者達が集ッて居た所である。其の聖堂前の、今日電車が走ッて居る處は所謂御茶の水だ。此の御茶の水といふ名は、水道橋の側に名水があッて、將軍の御茶の水になッたとい

ふので、それから斯く稱へたと傳へて居る。然し其の水は既に早くから無くなッて、水道橋の側には神田上水の樋が渡してあッた。廣重の繪などを見ても、水道橋と樋と、必ず二つ並べて畫いてある。勿論此處にも大きな樽と城門とがあッたのである。聖堂には學者が多かッたから、單に御茶の水では面白くないといふので、漢學者流に茗溪と名をつけた。月夜に舟を浮べて此處を小赤壁などゝ呼んだ者もある。實際其の頃は、下から見上げると赤壁の趣が確かにあッたのだ。駿河臺の方は、斷巖絶壁で數百年の大樹鬱葱として居り、聖堂の方の側も矢張り其の趣があッた。言はゞ藥研の底を舟で通る樣なもの、詞人墨客にとりてはさぞ面白かッたであらう。よし又詞人墨客でなくとも、大川の涼みの還るさ、屋根舟の淺酌低唱、櫓聲を緩く聞きながら、あの御茶の水にさしかゝると、螢が二つ三つ、ふはり〳〵と飛んで往くなど、成る程詩趣なきにあらずであッた。今では、電車が走る、甲武線の汽車が走る、樹木は大抵伐り盡されてしまッて居る。あそこを今日舟で通ッて赤壁と洒落る人があるならば、先づ狂氣の沙汰であらう。また御茶の水は郭公の名所であッたが、なんぼ郭公でも、電車の架空線からパチ〳〵と發する電光などを見ては、もう啼くことも出來まい。

此の邊で一寸面白く思ふのは猿樂町である。車夫などは猿を嫌ッてエテ樂町などと言ふが、此の猿樂町は、猿樂、即ち能役者の住んだ所で、其れから斯かる名前が出來たのだ。

雉子橋

此の雉子橋も、妙な事から神田の一名物である。昔此の橋の邊を丹後殿前と云ッて多くの湯女が居り、當時の風流者は、是非夕方からブラ〳〵と出かけたものださうな。此れからして昔のハイカラ姿を丹前と言ひ初めたのである

る。

神田區は先づ此んなものであらうが、さて其の次は麹町區である。

麹町區

今では麹町といふと、山の手の中心をいふ樣になッて居るが、四十年前麹町と云へば、麹町だけで、江戸城の西北、町らしい町は僅かに麹町ばかりであッた。全體江戸の町は、町ではなく屋敷である。商人の住む小部分の町を除いては、行商で用を辨じて居ッた。豆腐屋が豆腐の樣に豆腐い〳〵と柔い聲を出すと、豆屋が豆のコロがッた樣な聲を出す。竹屋が竹の艶やかな樣な聲を出し、履物の直し屋がデイー〳〵と如何にも不得要領な聲を出す。殊に壽司屋などは趣味のある意氣な聲を出した。俗歌にも

坊主だまして還俗させて、こはだの鮨でも賣らせたい

といふ。此れは坊主の讀經があまり美い聲であるから、其の美聲美男の坊主を壽司屋にして見たいといふ例の江戸趣味である。昔に溯れば溯る程、米

から、薪から、落し紙、髪付油、元結、其の他凡そ日常必要の品物を、悉く賣ッて歩いたもので、そんな風であるから、麹町の店商人は大變繁昌したものであッた。麹町と飯田町とが最も多く屋敷に出入をして居ッた、即ち大華客が多かッた。從ッて此の二つの町には、小賣商人としては隨分大きな者が居ッた。飯田町は殊に中坂が盛んであッたのである。

昔の本丸　西の丸　二の丸　三の丸

今の麹町區なるものには、昔の本丸、西の丸、二の丸、三の丸といふ大城廓があッて、それが今日の皇居となッたのである。本丸といふのは、今内務省の表門前大手門の中である。明治以前に燒けてから、全く其の俤が無い。然し此の本丸の場所が、足利時代に太田道灌が住んだり、遠山氏が住んだりした所で、甚だ歴史的趣味の深い所である。然し最初は勿論後世の樣な立派

な城ではない、溝を堀ッて生垣をこしらへ、木戸を建てた位のものであらう。徳川家康が天正年間に江戸へ入府の折、城の玄關の板が舟板であッたと傳へて居る。是に依りて觀るも、初めは極めて粗末なものであッたことを想像するに難くない。今の皇居から紅葉山の邊は小山で、江戸の初めには春さき花見などに出かけた處である。江戸が段々と發達するに從ッて、日本一の大城が出來たのである。尤も土堤の松は享保年間に植ゑたもので、今日までに二百餘年の星霜を經、わが皇城の壯觀を加へて居るが、享保の前には此等の松の影だもなかッたのである。外濠電車で濠に沿うて眺めて行くと、昔の城の俤が能くわかる。まア東京見物に來たら、電車を利用して、外濠線から赤坂見附で乘り換へ、三宅坂に出で、九段まはりをしても、築地まはりをしても、何れにせよ、兎に角馬場先門から和田倉のあたりを見れば、昔の城の有樣を略ぼ知ることが出來る。

參謀本部　昔の井伊家の屋敷跡

加藤清正の屋敷跡

さて三宅坂の側の參謀本部、有栖川宮の御銅像のある處から、日比谷の方を見ると、如何にも好い景色である。漫遊の外國人などは、東京第一の景色だと言ッて居る。あの參謀本部の處は、江戸時代に朱塗の門があッて、赤隊の名譽を博した井伊掃部頭の屋敷である。安政年間に櫻田門外で、三月三日の雪と消えた大老が、あそこの屋敷に居たのである。井伊家の以前は加藤清正の屋敷であッた。今日東京見物をする人は、あの參謀本部の前を通ッて、昔加藤清正が馬に跨り、威風堂々として往來したことを想見し、井伊大老が駕籠に乘ッて悠々として往來したといふことを聯想するならば、何となく低個去り難いものがあるであらう。麹町には中々面白い所が多い。

霞ケ關

此處から芝の方へ向いて行くと、霞ケ關へ出る。全體江戸は京都と違ッて風流の名は少ない所で、麻布、赤坂、牛込、本郷、麹町と言ッて見ても、如何にも俗な名であるが、此の霞ケ關ばかりは、實に風流な名稱である。謠曲の『東北』にも、

霞の關を今朝越えて

とあるが、恐らく東京第一の佳名であらう。今の外務省の在る所は、福岡の藩主黑田侯の屋敷跡である。此の黑田の紋は、炭團の樣な紋である。日本では何れの家にも紋といふものがあッて、樣々の形があるが、黑田家のは日の丸を黑丸にしたので、隨分振ッたものである。黑の紋附の羽織なら、紋の所は白く拔いて置けば可いのである。此の黑田の隣屋敷は、霞ケ關の坂を隔て

て藝州廣島藩主淺野侯の屋敷である。此の二つの屋敷は、昔江戸第一の立派なものであッた。霞ケ關の前が現今、海軍省、司法省、裁判所などになッて居るが、昔は大かた大名屋敷で、此の續きが、上杉、鍋島などの大きな大名であッた。今は皆日比谷の公園となッてしまッたのである。今では中流社會の人が、夫婦で子供を連れたり、若夫婦が肩を並べたりして此の公園を歩いて居るが、江戸の昔は、總模樣の掛を着た奥方、女中、上下で刀を佩した殿樣に侍士、高島田の小姓、大振袖の若衆、朝夕三ッ指で遊ばせ言葉といッた調子で、日を送ッた處と思ふと、如何にも其の變化に驚かざるを得ない。而かも殿樣方は一寸外へ出るにも、三四十人乃至五六十人の供を連れて行進かれたもので、其の孫曾孫が、今は一人で公園を散歩するなど一寸夢の樣である。日比谷公園の前を通る電車に乘ると、直ぐ華族會館がある。表門は昔の島津家の門で、こゝを裝束屋敷と云ッた。琉球から使節が來ると此の屋敷

で裝束を改めたから、此の名が起ッたのである。門の位置は昔と違ッて居るが、大名屋敷の門の型として今に殘ッて居るものである。帝國劇場の處も、商業會議所の處も、明治生命保險會社の處も、あの邊から又和田倉門へかけて、凡て皆大名屋敷であッた。

南北の町奉行

吳服橋内の鐵道院の在る所が北の町奉行所、有樂座の在るあたりが南の町奉行所のあッた所だ。南北の町奉行といふものは、今の警視總監、東京府知事、東京市長、裁判所長、或る時は大審院の判檢事、こんな役を悉皆兼ねた役目である。從ッて德川時代でも町奉行となると、多く手腕家がやッたもので、普通の人では出來なかッたのである。名高い遠山左衛門尉と云ッた町奉行は、青年時代に非常な放蕩者で、全身に文身までして居た位の人であッ

た。此の人町奉行になッてから、或る時吉原の花魁が此處へ呼び出されたことがあッた。其の花魁、フイと顔をあげて威儀堂々と見下して居る正面の町奉行を見ると、(此の時分の町奉行といふものは、座敷の中央に坐ッて居り、罪人は縁側の下の、砂利を敷いてある上に蓆を布き、それに坐らせたものだ然し士分は縁側であッた。)何ぞ圖らん昔馴染の嫖客である。遠山氏は左衛門尉に任官しない時分、金三郎と云ッたさうだ。それで此の馴染の女が、オヤ金チャンとやッつけた。さうすると、遠山氏が、貴様まだ女郎をして居るか、と一喝した。流石の花魁も、此の言葉に赤面して首を垂れた。通例の人ならば、威儀堂々と左右に屬官が並んで居る席で金チャンと呼びかけられては、先づ面くらふ處であるが、流石は遠山左衛門尉で、一喝の下に婦を閉口させた伎倆は敬服に價する。まア斯ういふ質の人が町奉行となッたのである。有名な大岡越前守も町奉行であッたのである。今の裁判法と違ッて、昔の裁

判は慣例と常識とでやッたのであるから、隨分振ッた裁判もあッたのである。

辰の口評定所

此の町奉行の外に、辰の口の評定所があッた。辰の口は今は埋められてしまッて分らないが、和田倉門の眞向と考へて置けばよい。此の評定所は、最高の裁判所、即ち大審院である。其の高等裁判所の側に傳奏屋敷といふものがあッて京都から徳川將軍へ勅使に來る公卿が宿泊した所である。此の勅使樣に、御馳走をする式部官があッて、其の式部長官が儀式を敎へないといふので腹を立てゝ切りつけた騒ぎが、例の吉良と淺野の元祿の騒ぎである。元祿の四十七義士の事を研究するには、是非本丸の松の廊下と、傳奏屋敷と、芝の田村町の田村の屋敷と、舊細川邸、今の高輪御殿と、京橋明石町の淺野の屋敷と、本所松坂町の吉良の屋敷と、それから高輪泉岳寺とを知らねばな

らぬのである。

此の辰の口の東の方に、道三橋、錢瓶橋といふがあッたが、今は何れも埋めてしまッた。江戸の初めは、此の邊も賑やかな町で、遊女などが居ッたやうだ。これから電車で神田區へ出て、九段まで行くと、靖國神社がある。昔は此のあたりは騎射馬場などがあッて、今と同じ樣な廣場ではあッたが、招魂社の樣な立派な神社などは無かッた。齋藤彌九郎（名高い幕末の劍客）の道場も此處にあッた。それは今の額堂の近所で、それから右と左も番町になる。

番町は今も昔も同じ樣な屋敷町である。唯昔よりは今の屋敷の方が立派なだけである。此の番町の町割は、道幅が廣くなッただけで往時と變りはないが、其の町名は少しく變ッた。今の上六番町に塙檢校の居た所がある。『番町で目あきめくらに道をきゝ』といはれた博學な檢校であッたことは誰も知ッ

て居る。

番町皿屋敷

番町皿屋敷は昔から名高いもので、今は富士見町になッて居る牛込門の中に、皿屋敷の跡がある。お菊が身を投げた井戸もある。市ケ谷の帶坂を上ッた處にも、皿屋敷と言ひ傳へて居るのがあるが、今の牛込門内の方が皿屋敷の本家であることは間違ひなさゝうだ。

此の番町邊でも、神田の小川町邊でも同樣であるが、昔は前述の通りに屋敷町で、樹木が鬱葱と生ひ茂ッて居ッたのである。番町は獨り皿屋敷ばかりでなく、化物話、妖怪談の隨分多い所であるが、畢竟此の町の夜が眞暗であッた故であらう。今でも番町邊の夜は、他の町よりも暗い方であるが、それでも招魂社の側を電車が走ッて居り、外濠にも電車があるし、飯田町にも同

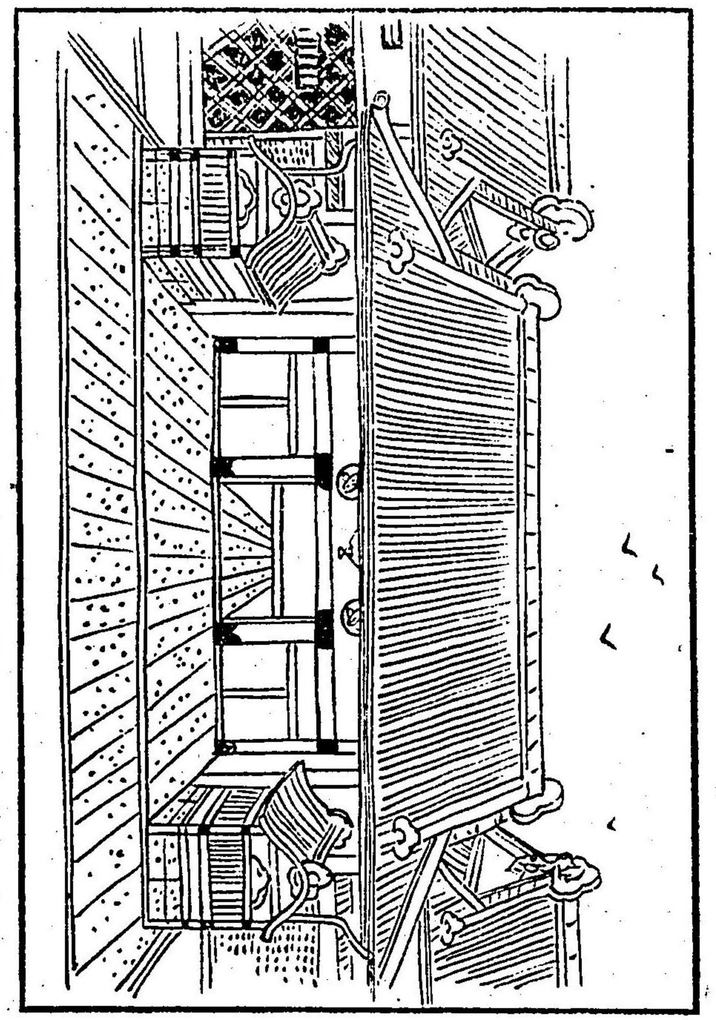
じく電車がある。此の電車の在る所は、夜通し電燈がついて居る。そして雨が降らうが、風が吹かうが、月が照らうが照るまいが、あの景氣の好い車が、折々ポールから電光の閃きを散らしてゴウ〳〵と往來して居る。其の上、馬車が走る、自働車が走る、人力車が走る、家々には瓦斯燈、電氣燈がある、門前には其の家々の名を書いて軒燈が點いて居る。どんなに暗い部屋の中でも、洋燈位は用ひて居る。窓と云へば、多くは明るい玻璃である。然るに昔の江戸を考へて見ると、屋敷々々の塀も門も窓も、多くは黑く塗ッてある。屋敷と屋敷との境界は、大抵樹木が茂ッて居る。何處の家でも、門前は軒燈など點ける家は一軒も無い。辻番といふものがあッて、處々に朦朧とした燈火がついて居るのみである。家の中の燈火は何であるかと言へば、燃油の行燈に燈心といふ始末。それも其の心を三本にすると大變な不經濟だといふので、嫁ならば直ぐ姑に御小言を頂戴するといふ次第。さして用の無い時は、

まア燈心を一本として居たのである。そして夜になれば、門は直ぐ閉めてしまふ。よし光が外に漏れて見えるにしたところで、先づ幽靈火位のものであッたらう。勿論冠婚葬祭の大禮には、百目蠟燭などの大物を用ひることもあッたが、屋敷の外にまで其の光が洩れる樣なものは無かッた。處へ又、今の樣な電車、馬車の類は一切無かッたためであるから、廣い番町でも夜になれば、先づ物音もしないと言ッても可い位。火事でもあれば、今の警視の樣な役人が馬に乘ッて出て來ることがあるが、其の他夜中馬の蹄の音の聞えるなどいふ事は、決して無い。其の上前に言ッた通り、樹木が生ひ茂ッて居たのであるから、其の淋しさは迚も今の東京の人の想像も及ばぬ所であッたらう。番町に化物屋敷の多かッたのは、即ち之が爲めであッた。狐も狸も勿論澤山に棲んで居た。雨のしと〳〵と降る夜、お菊が一枚二枚三枚と段々に皿を數へて行き、十枚目にはワッと泣く。此れも其の淋しい番町の夜が背景となッて

居るから、こんな風に幽靈の活動も出來たのである。今の賑やかな番町では、中々幽靈も出やうがあるまい。

九段坂　中坂

番町から後戻りをして東へやッて來ると、再び九段坂へ出る。此の九段坂の並びに中坂がある。昔は中坂の方が賑やかで、九段坂の方は寂しい所であッたが、今では反對に中坂の方がさびれて九段坂の方が賑やかになッてしまッた。九段坂といふのは坂が九段になッて居たのだといふが、よく分らぬ。兎に角人力車でも上ることの出來ない位の急な坂であッた。廣重の江戸名所の繪を見ると、九段坂の上から下りて來るところの槍を立てさせて馬に乘ッた人が、其の腰から上と馬の鼻面だけを畫いてある。坂の急であッたことを知ることが出來る。



（番々隠）　駅　依　野　浅

麹町の山王の祭といふものは、昔は天下祭と稱へられて、非常に盛なものであッた。神田の祭も中々盛なものであッたが、此の山王の祭の山車を、田安門から中へ引込んだこともあると云ふ話である。何時の頃か知らぬが、何でも此の山車が坂から辷り落ちて牛が死んだといふことである。其れ程急な坂であッたらしい。今の電車の通る九段坂から見おろすところの溝の樣な城濠は、牛ケ淵と稱へた所である。東京にはまだ小石川の大曲の處に千鳥ケ淵といふ名がある。其の外にも淵といふ名は少なくないが、今では殆んど知ッて居る者はない。然し此の牛ケ淵と鐘ケ淵だけは知ッて居る人もあらう。

九段坂を下ると右手の處に小さな公園がある。靖國神社の附屬地になッて居るが、彼處が昔は武家屋敷であッたので、安政時分に其の武家屋敷を役所にして蕃書取調所を置いた。其の蕃書取調所は、先づ今でいふと翻譯局のやうなもので、後にこれが學校となッて開成學校となり、それから今の帝

國大學の基礎となッたのである。其の時分に、亞米利加の公使などが此の藩書取調所に來ることがある。其の時には駕籠に乘ッて來たのである。その駕籠は大名の乘る駕籠で、身體が大きいから足を縮めて乘ッたらしいが、隨分滑稽なものであッたらう。それから中坂の方へ來ると、中坂下に曲亭馬琴の住んだ家の跡がある。馬琴の『八犬傳』と言へば、日本中知らない者は無い位である。其の『八犬傳』はどんな立派な所で筆を執られたものだらうかと思はれるが、僅か四室か五室かの小さな家で書かれたのである。今では中坂の下を電車が通るが、馬琴の時分に斯んな騒々しいものがあッたなら、此の大著作家は何處か別な處に住んだかも知れぬ。

御大老の屋敷

麹町區はこれから後に立戻ッて內務省大藏省のあたりに行ッて見ると、また變り果てたものである。內務省も大藏省も、昔は酒井雅樂頭といふ大名の屋敷跡で、今の大藏省の門內の庭、門から覗くと直ぐ分るあの庭を、ことわッて見に入れば門番は別に小言も言はぬが、あの庭は御守殿の御庭と云ッて、昔德川家から大名へ來た奧方のことを、御守殿樣と稱へたものである。昔の繪にある椎茸髷の奧女中の髮も、亦御守殿とも云ッたものである。あの庭を見ると、今では大藏省の門衛だの、小使だの、高等官だのが、印半纏を着たり、フロックコートを着たりして歩いて居るが、五十年前の昔は、あの池のまはりを、奧方が女中腰元を引連れて歩いて居られたのである。固より男禁制で、御庭の掃除まで女がして居た位であッた。此の時分の奧女中といふ者は、年中男の顏を見ることがない。奧附の御用人といふ白髮頭の老爺さんか、下等な小使の樣な者の顏の外は見ることが出來なかッた。この男禁制の御庭が、無風流な役所の庭となッてしまッたのである。然し四五百年前の事

を考へて見ると、また變ッたもので、將門の首塚と云ふものが此の庭の築山にあるが、其の將門の首塚の築かれた時分は、彼處は芝崎道場と云ッて念佛三昧の所であッたのである。田舍の婆さんや爺さんが寄ッて、念佛を高聲に唱へたのである。それが今言うた通りお姫樣奥樣御散歩のお庭となり、又御役所となッてしまッたのである。此の大藏省の隣の內務省も、矢張り酒井雅樂頭の一つ屋敷であッたのだが、酒井雅樂頭といふと、昔の人の耳には、今の何々公爵とでもいふ樣に響いたもので、播州姫路の城主であッて、家代代大老といふ高職に上ることの出來た家で、今で言へば元老と總理大臣とを代々兼ねる樣なものである。其の酒井雅樂頭が居ッた屋敷であるから、通行の人も、心から恐怖する樣な念を起したことであらう。殊に此の屋敷は有名なる伊達騷動の時に、原田甲斐と伊達安藝とが刄傷の場所で、燒失前は柱などに切りつけた痕跡が殘ッて居ッたといふことであるが、何分にも度々燒け

315482

た屋敷で、今は何處といふことは分らぬ。

赤坂見附　清水谷公園

そこで右の內務省の前を南へ行くと和田倉に出る。それから馬場先となる。今の皇城は誰でも知ッて居る通り、昔の西丸である。宮城の事は、あまり憚り多いことであるから、先づ差し措いて、櫻田門を出で、濠端づたひに電車に乘ッて赤坂見附へ來る。此處には昔は赤坂門といッて、極めて堅固な、立派な、城門があッた。今では全く其の跡方も無い。此處には閑院宮樣の御住居がある。閑院宮樣の御門は、昔の松平出羽守の屋敷跡で、雲州侯と稱したものである。あの御門を拜見すると、昔の容態がよく解る。其れから左に曲ると紀尾井町へ出る。紀尾井町へ出ると、あそこに伏見宮樣の御住居があり、伏見宮樣に對して墺地利國の公使館がある。その伏見宮樣の御屋敷の下の方

に、清水谷の公園と云ふ所がある。江戸の昔は、たゝ淋しい大名屋敷の裏手の、薄暗い狹い途であッたが、今では小公園の姿をなす樣になッた。其處に明治十一年の春暗殺された大久保利通の哀悼の碑が建立せられてある。實際はあの碑より、まだ少し向ふ側になッた處で暗殺されたのであるが、まアあの邊を暗殺の場所と思へばよからう。一寸こゝで暗殺當時の模樣を話さう。

一體大久保と云ふ人は誠に剛膽な人であッたから、當時暗殺せらるゝ處れがなかッた譯ではないが、然し彼は馬車の中にピストル一挺入れることもせず、勿論護衞の巡査も隨れずに、別當二人に先をはらはせて御者が一人、あの清水谷公園のところから喰違門へ出て赤坂御所に參内しやうとした時の事であッた。あの邊は其の頃一面に草蓬々と生ひ茂ッて居ッて、空屋敷のみであッたので、其の物陰から島田一郎等の壯士がばら〳〵と驅け出して、一人が馬の足を拂ふ、一人が御者を刺す、二人が馬車にかゝる。別當は恐れて逃

げてしまッた。其の時大久保が馬車の中で何か書類を見て居ッたが、待て、と一喝して靜かに書類を箱の中にをさめ、馬車の戸を開けて空拳壯士を相手に奮鬪したのである。勿論如何なる英雄豪傑でも、空拳で勝てる譯のものでない。遂に路傍の草叢の間に倒れて斃去せられた。其の時分の淋しさと今日の公園の有樣とを比較して見ると、此處も變ッたものである。

山王樣　平河天神

清水谷公園から、外濠線へ出て赤坂へ來る。それから山王下で下車して山王の公園へ行く。此の山王は、極昔からの神社ではないが、德川氏になッてから祀られたので、特別に崇敬せられたものであッた。今でも老樹が鬱然として居るが、昔はもッと生ひ茂ッて居ッたもので、中々神々しかッたのである。麴町區には此の外平河町に平河天神がある。此れは電車途から、餘程寄

り途になッて居るから、わざ〳〵行かねば能く分らぬ。此の平河天神は舊城内の平河口にあッたもので、本郷の湯島天神と共に古いものである。先づ翹町區いの此の位にして置きませう。

赤坂區

江戸には昔から色に緣のある地名が少なくない、例へば青山、赤坂、目白、目黑の類で、此等は皆色に緣のある地名であるが、赤坂や青山は殊に名高い所である。前にも言ッた通り、赤坂見附のところに在ッた赤坂門といふのは城門中でも最も堅固なるもので、一種特別なる建築法で造へたものである。今では全く取りこはされて、跡方も無くなッた。此の赤坂區で是非話さねばならぬのは、赤坂御所と溜池との事である。

赤坂御所

赤坂御所は、もと紀州德川の中屋敷であッた。其の御庭は有名なる庭園で、今は其の上に御手入れをなされし由であるから、恐らくは日本でも、明治式

と舊日本式とを折衷した庭園の模範なるものであらう。此處は明治となりて後に、長らく假の皇居となりし所であるから、特に記念すべき所である。

赤坂といふ名は、元來武藏野の茜草が生ひ出た處であるから、それで赤坂といふのだと云ふ說がある。けれども其の說の眞僞は能くわからぬ。兎に角皇居の御庭の中には、鎌倉街道の記念の塚などが今でもある。昔の江戸の往來は、皇城の南にあッたのではなくて、北西の方について居ッたものである。これは足利時代の話である。

溜池

赤坂には今、赤坂藝者と稱する者共の住む一區の町があるが、あそこが所謂溜池で、溜池、山王下邊は、著者が記憶して居る時分にも、まだ今の不忍の池の半分位はあッた樣に思はれる。昔は不忍池よりも大きな池で、江戸の

用水は此の溜池から引いたものである。今、閑院宮樣の御屋敷から山王下にかけて、溝の樣な濠がある。あれは溜池の名殘である。あれからして虎門女學校、今の宮內省御用地の石垣の下に、滔々と大瀧の如くに水が堰かれ落ちて居ッたのである。此等も甚く變ッたものである。

赤坂に藝者の類が繁昌したのは、今始まッたことではなくて、昔も遊女のあッた所て、一時中絕してしまッたが、今又盛んになッた次第である。こゝから電車道が青山に通ッて居る。

青山墓地

今の青山墓地は、言ふまでもなく大名の屋敷跡で、練兵場も亦青山の徒、同心の樣な德川氏の小祿を食んだ士が住ッた所である。然し此の練兵場も、やがて他に移すと云ふ話があり、それから墓地も移轉するといふ說があるか

ら、又此處にも人家稠密の景色を顯出するのも遠いことではあるまい。

モウ一つ爰で話すが、青山の墓地へ行ッて見ると、見上げる樣な大きな墓石が澤山ある。明治時代の人には左程珍しくもなからうが、明治以前の人の目には實に珍しいもので、昔は、將軍の親族だとか何だとかいふ人達の墓石は隨分大きいものであッたが、其の他に今日青山で見る樣な大きな墓石は江戸中一本も無かッたのである。今では青山の墓地は、恰も墓石の競爭場の樣なものである。赤坂區には此の他にも案内する所が少なくないが、先づ此んなことにして置かう。

麻布區

麻布は、江戸で最も古い名で、麻布村と呼んだものである。今でも麻布は屋敷のみ多く、町家は數へるほどであるが、僅かに新網町、網代町、永坂町あたりが町らしきのみ、其の他は庭園の多い屋敷である。區の西部、廣尾町などは、廣尾の原が新開町になッた所で、小石川、牛込、四谷などに比して、更に一層の屋敷町の區と謂ッてよい。江戸の昔は、新網町が貧民窟で名高いのと、一本松が老樹として名高い位で、先づ僻地と言ふべき所であッた。此の區の地名には、隨分變ッたものがある。我善坊、猫穴、蝦墓ケ池等で、猫穴、我善坊のことは馬琴の靈筆に成ッた『八犬傳』で誰も知る所であるが、我善坊は實は龕前坊で、二代將軍秀忠の夫人、淺井長政の女の龕を此處に置いてから、龕前坊と呼んだといふことである。又猫穴は馬琴の說明に據れば、

猫狸といふ狸の様な動物が居たからだといふが、兎に角、山深い所が聯想される。蝦蟇ヶ池は、元、旗本山崎氏の屋敷で、今は子爵渡邊國武氏が冥想座禪を凝らす所である。曾て此の池に大蝦蟇が居ッて、其の御利益の守札を出した。火傷の守、或は火伏の守等である。何時から始まッたか確かでない。大蝦蟇、猫狸、何れも女子供の恐がる地名である。尙ほ歴史に細かく立入れば、此の他種々の名所もあるが、江戸見物の名所としては、今も昔も、取り立てゝ言ふ程のものは無い。大木では山元町の善福寺の大公孫樹がある、親鸞聖人の杖と言ひ傳へてあるが、兎に角善福寺は江戸の古刹である。

四谷區

今は四谷と云うても、田舍どころではなく、盛な場所であるが、雪中庵嵐雪が、

四十にて四谷を見たり江戸の春

というて居るのでも想像されるので、交通の不便であッた時分には、江戸の南東に住ッて居た人などは、滅多に四谷などに來たものでない。其の頃本所や深川あたりの人が四谷の親戚へ來ることがあれば、來る何日には御訪ね申すからと前觸れをして置く、其の親類の方では、音信を聞いて其の土地の名物でも購求へて置き、風呂などわかして待ッて居る。先づ朝から來て一日がかりの客であッた。一日がゝりの客は別に珍しくもなからうが、同じ東京中で四谷の名物だからと云ッて、本所深川の人に御馳走するなどは隨分振ッた

ものである。此れは實際の話である。

東京も電車が出來て、全く風俗が一變したが、其の前には人力車で風俗が一變した。人力車もなく無論電車などのありやう筈のなかッた明治以前であるから、本所深川あたりの人が四谷へ來るのは、丁度今の人が鎌倉か大磯へでも行く位の氣がして居ッたらう。此の四谷には、電車の終點に新宿といふ所がある。此處には御料地があるが、昔は内藤(大名)の屋敷であッたので、今では昔と一變した立派な御庭となッたものだ。又四谷には鮫ケ橋といふ所がある。此處は有名なる貧民の多く住ッた所であるが、今では立派な人も住居する樣に改まッて來た。昔は四谷あたりは人家の屋根が、十中八九は藁葺であッたので、昔時祭禮の時に、或る町家の屋根に大きな月の造り物をこしらへて、武藏野の原に見立てたといふ話があるが、成る程藁家の屋根に大きな月の造り物を置いたなら、一草より出でゝ草に入る』といふ光景を聯想する。

ことが出來たであらう。今も此の四谷や、青山の方などの電車道を注意して、見て歩いて居ると、裏通りなどには中々藁家が澤山ある。これもモウ十年を待たずして見ることが出來ない樣になッてしまうであらう。近頃或るところで、明暦年間の火事の繪卷物を見たことがあるが、武家屋敷の門や塀には瓦が置いてあり、又寺の堂の屋根などにも瓦が置いてあるが、其の他は立派な家も皆柿葺であッたので、中等以下の家は皆藁家であッたのだ。少し古い話だが、慶長年間に日本橋の本町の通りで半兵衛といふ商人が、往來に面した方の屋根に半分瓦を置いてあッたといふので、半瓦の半兵衛と稱して其の頃評判なものであッたといふことである。其れ等から考へて見ても四谷や青山あたりは、先づ皆藁葺の屋根であッたと見て差支はなからう。

四谷にモウ一つ名所があッた、それは四谷左門町のお岩稲荷である。(最近巣鴨の染井に移ッたといふ。)お岩の話は今から百年位前の話であるが、嫉妬

の強い女が、狂亂して死んでしまッた、其の亡靈が亭主にとりついて遂に殺してしまッたといふことである。田宮といふ士人の家に起ッた話である。それが何ういふものかハヤリ出して、美的職業、性慾的職業に從事する者が皆信仰したものである。お岩と云ふ亡靈の顏は、髮の毛が禿げおちて片目が大きくて片目が小さくて、所謂二た目と見られぬ顏である、而かも嫉妬の强い狂亂な女であッたのである。それを前に言ッた樣な職業の婦人などが、お岩稻荷と神にして信仰するといふのは隨分奇妙な話である。全體江戸の昔からして、所謂淫祠が多かッたもので、彼等信者が此等の神々を拜むには、全く禍福損得の一點張である。明治になッてからは進門教會、穴守稻荷などが中々盛である。然し淫祠も舊江戸の繁榮を飾ッたものゝ一つである。兎に角四谷と聞くと、直ぐ此のお岩稻荷を聯想した位勢力があッたものである。先づ四谷はこんなことにして置いて、次は牛込である。

牛込區

牛込と云ふ名は古い地名である。牛込區全體は昔屋敷町であッたので、極めて淋しい所であッた。此の牛込の堀端に逢坂と云ッて、今でも電車の車掌が逢坂下〳〵と呼ぶ處がある。薄暗い狹い坂であるが、此の逢坂には奈良朝時代の古い話がある。小野の美佐古といふ人が、其の當時武藏守に任ぜられて此の國に下ッた時に、「さねかづら」といふ美人が居ッて、美佐古はこれを妻にもらッた。後美佐古が任滿ちて奈良へ歸り、到頭病氣をして此の世を去ッてしまッた。ところで此方に殘された「さねかづら」が非常に美佐古のことを戀ひ慕ッて、夜の目も眠らぬ有樣であッたが、どうにかしてモウ一度美佐古に逢ひたいものだ。何卒逢はせ給へと神佛に祈願を込めた。そして此の逢坂まで來ると、美佐古が在りし昔の俤其のまゝの姿でそこに居ッて、「さね

かぐら」に逢ッたといふ話であるが、虚でも面白い風流な話である。

此の逢坂の並びに神樂坂がある。神樂坂と云へば、今では非常に賑やかな所で、先づ山の手では第一等と言はれる場所だが、昔は中々そんな所ではなかッたので、淋しい屋敷町の坂であッた。それが唯今の様に繁昌になッたのを見ると、隨分變ッたものであると思はれる。此の他、牛込にはまだ名所が中々ある。山鹿素行の墓であるとか、彼の有名な由井正雪の住んだ家の跡などもある。先づ牛込區は此の位にして、これから小石川區に移らう。

小石川區

小石川は昔の江戸で言ふならば、山の手の山の手で、實は江戸案内として言ふべき事は少ない。何處も彼處も皆武家屋敷のみで、其の武家屋敷も、大名小路だの、番町邊の旗下屋敷は、昔から瓦屋根や黒板塀の堂々たる普請であッたが、小石川あたりのものは先づ中屋敷か下屋敷のみで、稀には上屋敷もあッたが、概して大名などが、其の家來などを住ませた所で、庭園の廣い別莊地であッたから、頗る振はないもので、先づ茅葺屋根とか、竹藪とか、森だとか、又は小さな百姓屋が並んで居ッたと思へば、當時の小石川區の景色は略ぼ想像することが出來るのである。尤も今の砲兵工廠、昔の水戸様の屋敷などは別物で、明治になッてからも十年頃までは、赤く塗ッた表門が殘ッて居ッた。有名な徳川光圀(黄門様)徳川齊昭(烈公)などの明君主だとか、

藤田東湖などいふ學者達などの住んで居ッた所で、殊に今後樂園と稱へて、内外の貴賓を招いて宴會などをする庭があるが、此の庭はモウ大分荒れては居るが、東京となッてから、見ることが出來るやうになッたので、昔は決して吾々の見ることの出來ない庭であッたので、今の吹上の禁苑を拜觀するよりも、もッと手重いものであッたのだ。これは江戸案内といふ中には入らず、東京案内としてもよい位であるが、何か宴會でもあッたならば、必ず拜見すべき所である。尤も工場の煤煙の爲めに、年々大木が腐朽れてしまッて、昔の十分の一の俤と言ッてもよい程であるけれども、恐らくは禁苑の外、東京第一の庭であらう。此の砲兵工廠の外に、此の區で名高いのは、傳通院である。

傳通院

近頃は電車が傳通院前で停ることになッたから、中々賑やかな所となッた。然し傳通院は昔の方が、奥ゆかしい堂々たる寺であッたのである。左右には二百年餘の樅の木立があり、境内は一塵つけずで、今の餌差町、戸崎町邊の上になるあたりは、鬱蒼たる大森林であッた。其の樹下に、德川家康の母傳通院、豐臣秀頼の夫人天樹院、又は加賀の松雲公と呼ばれた名君の母清泰院、其の他多くの名君賢婦の墓が並んで居ッた所で、今でも寺僧にことわッて參拜したならば、昔ゆかしい感が起るであらう。此の傳通院から北に當ッて植物園がある。

小石川植物園

小石川の植物園は、帝國大學理科大學に附屬して居ッて、今では日本第一の植物園である。此處は德川時代には、御藥園と稱して漢法家の藥用植物園

であッたので、又養生所とも云ッて施療院を設けられてあッた。此の植物園の一隅に昔風の泉水のある處は、元二三軒の旗下屋敷であッたが、庭は全く昔の所謂大名庭である。此等を見ると德川盛時の屋敷の庭といふものが能くわかる。其の他植物園には大木もあり、又近く發見せられた貝塚などもあるから、必ず一覽すべき所である。

豐島ヶ岡

植物園から、北西の方へ進むと、大塚電車の終點からして四五町位の處に豐島ヶ岡がある。今は大塚坂下町になッて居るが、昔は權現山と稱し、明治以後になッて、畏れ多くも皇室の御陵地と定められて、親王、內親王、王、王妃方の御墳墓がある。丘の傍に護國寺がある。昔は此の邊數萬坪、護持院護國寺の境內であッたので、今も護國寺の觀音が昔のまゝに盛である。此れは

元祿年間の普請である。今は三條內府實美卿の御墓もある、其の他知名の人の墓がある。此の寺の門前が音羽町と云ッて、享保時分には盛な遊女街であッた。然し遊女街と言ッても、今の吉原を見る樣な所と思ッては間違ひ、恐らく田舍の宿場よりも更に下等なものであッたらう。これから關口へ行く。

五月雨塚

昔芭蕉が、目白臺から、早稻田田圃の方を眺めて、江州の粟津ヶ原あたりの趣があると言ッて、大層此の邊の景色を賞讚したさうである。後に宗瑞、馬光などいふ俳人が、芭蕉の

さみだれにかくれぬものや勢多の橋

といふ短冊を塚にをさめて、これを五月雨塚と稱した。今では田中前宮內大臣の邸內になッて居る。今でも田中伯の邸內の一部に芭蕉庵といふ庵があッ

て、芭蕉の風流を偲ぶことが出來るのである。此の早稻田の田圃邊も、以前は詩にも歌にも作られたものだか、近頃では中々そんな趣味ある景色などは何處へか失せてしまッて、殆んど皆貸家ばかりとなッてしまッた。殊に鶴卷町のあたりは大變賑やかになッたから、近江の粟津が原の景色などとは全くかけはなれて、似て居るどころか、想像も出來ぬ。

目白不動　鶴龜松

五月雨塚の上の方の山一帶を目白臺と稱へる。此處には目白の不動がある。芝高輪白金の南西には目黑不動があり、又本鄕の第一高等學校と染井との間に目赤不動がある。此の外、目青と目黃との二不動があるといふが、此れは餘程の江戸通でなければ知らぬ。それから椿山といふ處がある。これは昔は人の知らなかッた處であるが、近來山縣公爵の屋敷となッたので有名になッ

て居る。更に進んで、高田豐川町に鶴龜松といふ名木があッた。鶴と龜との二本の松であッて、細川侯爵家の門前にあるのだが、今では龜が枯れてしまッて、鶴だけになッて居る。全體東京には、松があまり多くないので、あの御城濠の端の松は別として、其の他に江戸十八松などと云ッて、大層松を賞玩したものである。殊に德川氏は曾て松平氏を名のッたゆかりもあるので、格別に松を尊まれたものである。此の鶴龜松の前を眞直に西の方へ行くと、雜司ヶ谷の鬼子母神がある。此の鬼子母神は、今も昔にかはらず繁昌である。殊に十月頃の祭禮の折には、太鼓をたゝいて中々盛んなお祭がある。流石は日蓮上人で、其の足跡の至れる處、何處でもドン〳〵と盛んである。殊に毎年の池上の御會式などは、天下一品のものであるが、先づ此の鬼子母神の祭も、其れに次ぐ面白い祭禮である。

鶏聲ヶ窪

これから小石川を後戻りして本郷の方へ向ッて行くと、小石川原町邊に鶏聲ヶ窪といふ處がある。此れが中々名高い所で、今でも土井子爵の屋敷がある。昔、土井の屋敷で夜な〳〵鶏の鳴く聲がする、そこで其の聲のする方へ段々辿ッて行ッて見ると、こはそもいかに、井戸の中に黄金の鶏が居て其れが聲を出すのであッた。それから鶏聲ヶ窪といふ名が起ッたといふ。然し又林町に徳川伯爵の屋敷がある、其の邸内に一里塚がある、鶏聲ヶ窪といふのは同邸内であるといふ説もあるが、兎に角此の邊は樹木鬱蒼と生ひ茂ッた處で、其れ故林町と名をつけられたのである。今でも昔のおもかげを偲ばしむるに足る位の森林の一部がポツ〳〵殘ッて居る。又此の鶏聲ヶ窪といふ鶏聲は傾城と書くので、鎌倉時分の遊女町であッたといふ説もある。鎌倉時

分の田舍の遊女町であッたならば、傾城ではなくして傾屋位のものであらうと思ふが、何しろ地名としては中々風雅な所である。從ッて種々の説も起ることになるのであらう。小石川は先づ此の位に切りあげて、これから本郷に參らう。

本郷區

今では小石川と本郷との間を一條の電車路が通ッて居るので、劃然と區劃されてある。原町、林町、駒込あたりはまだ少し分りにくいが、地勢を考へて見ると、白山下あたりから水道橋あたりにかけて、低地は所謂礫川の流れで、大きな谷になッて居ッて、一方の高い一面が本郷臺であり、他の一方の側は白山、林町あたりの臺地である。本郷區も小石川區と大同小異である、一部分は上野廣小路に續いて居ッて、低くなッてるが、これは不忍池の流の末である。本郷で先づ第一に指を屈せねばならぬのは、御茶の水の聖堂である。

此の聖堂は、今では女子高等師範學校の一構になッて居るが、昔は今よりも數倍の大きな地面を占めて居たので、今の女子高等師範の裏、電車道のあ

たりは、當時學問所と稱する講堂や、寄宿舍などがあッて、旗下の子弟は固より諸藩臣も亦入學したものである。聖堂は初め、今の上野の櫻雲臺の林家の邸内にあッたのを、元祿將軍綱吉が、此處へ移して造營したものである。此處は今教育博物館となッて居るから、江戸見物には必ず見なければならぬ所であらう。巧く支那の風をうつしてある。此の聖堂に祀ッてある孔子の像は、藤堂高虎が朝鮮から持ッて來たものだといふ說もある。近頃は孔子祭典會が設けられて、聊か復古の姿も見える。此の聖堂の裏手の電車路を北の方へ行くと、舊加賀樣の屋敷がある。今の前田侯爵家の屋敷は、昔の一部分のみを占めて居るに過ぎないので、他の部分は醫科大學の敷地となッて居る。同大學の赤門と稱するのは、昔の所謂御守殿門である。此の御守殿門については、前に大藏省の話をした時に言ッておいた筈である。赤門はモウ一つ今の大學の正門の處にあッたのである。それで大學のことを赤門などゝ呼ぶに

至ッた。大學の中に御殿と稱する所があッて、今では教授の會議所や食堂に充てられてあるが、此の御殿の周圍に昔の庭のおもかげが殘ッて居る。其の庭石や松などを見ても、當時如何に立派なものであッたか想像することが出來る。

今の赤門の傍の方に梧山といふ所があッたが、今では僅かに其の跡があるのみである。此の外、加賀の雪獻上といふ名高い話がある。其の雪をかこッた場所もあるのだが、今は何處になッて居るが判然せぬ。然しこゝで一寸雪獻上の話をしやう。

昔から前田家では、夏の土用になると金澤から雪を取り寄せて將軍へ獻上した。ところが一々金澤から取り寄せるのが容易でないところからして、江戸の屋敷に大きな穴を掘ッて、雪が降ると極めて清潔なところを採り、それを桐の箱に入れて其の穴に入れ、其の箱のまはりには數萬坪の屋敷の雪を入

れて翌年の六月(今の七月)までかこッて置く。六月になると、桐の箱の雪を取り出して將軍へ獻上する。近傍の商家などの者は、土瓶をさげて御殘りの雪を頂戴に出たものである。其の頃の江戸には、夏期雪は無し、氷は無し、勿論アイスクリームもサイダーもある筈はないから、所謂御殘りに、よしや少し位は砂が混ッて居やうとも、大に賞美して喫し且つ飲んだことであらう。今は、これも江戸名物の一つであッた加賀ボーと云はれた士も居ず、雪獻上の話もなく、廣い構内には角帽學生と看護婦とが往來するのみである。

下谷區

下谷區は文字通りに下谷である。昔は沮洳の地で、之を埋め立てたのである。此の區には、上野公園と根岸の外、別に名勝の地が無い。

今の上野公園、昔の東叡山寛永寺は、僧天海の計畫で、寛永年間に建てられたのである。尤も櫻雲臺の場所は、林羅山の屋敷跡である。今の竹の臺、繪畫會や、各種展覽會のある場所は、昔江戸時代には、輪奐の美を盡した中堂文珠閣などが在ッたので、今日の上野公園全體が、全く世塵を離れた一大淨域であッた。それが明治戊辰の年に、兵燹の爲めに悉く灰燼となッてしまッた。唯今僅かに昔の俤を留めるのは、五重塔、東照宮、清水觀音、兩大師、德川家の靈廟位である。靈廟は、兵火は免れたが、目下隨分荒廢して、芝に較ぶれば、昔の俤は無い。こゝに不思議の舊形を存して居るのは、

博物館の門である。此の門は、昔は上野の宮樣の御門である。要するに公園面積二十五萬餘坪は、鬱蒼たる松、杉、樅等の、一大丘陵であッて、其の樹間朱碧の殿堂が隱見して居ッたのだ。俳人馬光が、

松杉の上野を出れば年の暮

と詠んだのを見ても、寂寞淸淨の地であッたことが想像される。櫻も澤山にあッたが、山內は花見だけを許して、酒肉は禁じてあッた。土瓶に酒を入れて行ッて飲んだ位のことである。尤も元祿時代には、小袖幕など稱して豪奢を競うたやうであるが、醉狂は嚴重に禁じられたものである。今は此等の大樹も漸次に枯死し、櫻のみは新陳代謝して居るが、遠からず全く昔のおもかげを失ふであらう。公園の前に三橋といふ所があるが、文字の如く三箇所に橋を架けたもので、中央は將軍のみの通路、左右が普通の往來であッた。佐倉宗五郎が芝居で直訴をするのは、此處なのである。又此の三橋邊は、戊

辰の際には砲煙彈雨の修羅場となッた處である。不忍の池も昔よりは大變小さくなッたので、江戸開府當時は、今の公園の邊が山、下谷一圓が、不忍の池の流と言うてもよい位であッたのだ。それが段々に埋め立てられて小さくなり、明治以後は、益々狹くなッて、今日は池中の蓮と、辨天の宮が、舊時の景色を留むるのみである。

此の上野に寛永寺の盛なりし頃は、池の端も湯島も下谷も、多くは此の御寺の餘澤を蒙ッて生活したのであッた。精進料理の大きなものなどが出來たのは、全くこれが爲めである。今は其れ等の寺院も、僅かの地所を貸地として生活を計るやうな有樣になッた。公園の後方が谷中の共同墓地、此處にも感應寺といふ大きな寺があッたが、今は五重塔のみ殘ッて居る。此の谷中を下ると、鐵道を越して根岸となる。根岸は呉竹の根岸などゝ云ッて、通人の住ッた所であるが、今は、藪蚊の少なくなッたと同時に、昔の風流も失せ

てしまッて、寧ろ俗氣多き所となッたが、御行の松ばかりは、昔ながらの綠である。此の松のほとりには、抱一も住み、鵬齋も住んだことがあるが、今は其の跡さへ分らぬ程になッた。

根岸から東南は、江戸時代には、まるで田舍で、坂本、入谷、龍泉寺、誰もこれ等を町の中とは思はなかッた。今では細かい家が澤山並んで居る。

淺草區

觀音堂

江戸で最も名高いのは、淺草の觀音である。今の觀音堂は、慶安三年德川氏の營造であるが、昔の本堂は、源頼朝が、梶原景時に命じて造らしめたのだと云ふ傳說もある。そして其の中興は、天慶五年、平將門、藤原純友などの頃である。これでも隨分古いと思ふが、其の實、此の觀音堂の創建は、もッと〳〵古い推古天皇の頃だとも言ひ傳へて居る。江戸の古地圖を見ると、觀音の在る處は、島の樣になッて、小高い場所である。隅田川の川幅がまだ〳〵廣く、今の下谷や神田が、大沼、大池であッた時に、此の觀音堂だけは小高い處に建てられたものと見える。言ふまでもなく、此の淺草觀音の盛大

に繁昌する樣になッたのは、德川時代に入ッて後であるが、然し此の觀音のあッたのは、大昔からである事を忘れてはならぬ。江戸の昔、此の淺草の觀音と言へば、今日の公園地、子供の娯樂場、勸工場、デパートメント・ストア、まア當時に於けるあらゆる物の備はッた所で、今でこそ、上野とか、日比谷とか、遊び場が多くなッて來たが、江戸時代には、花見を外にしては、唯此の淺草觀音一箇所あるのみと言ッてもよい位であッた。然し其れにしても、今の樣に五區の六區のと廣いわけではなく、僅に觀音堂の周圍の、今日の一區、二區、それに七區の中店通りがあッただけで、極めて狹かッたのではあるが、その賑やかな事と言ッたら、蓋し當時江戸第一であッたのだ。搗て加へて吉原は近所であるし、川を隔てゝ直ぐ向島の櫻があり、天保以後は猿若町の芝居もあり、其の上、信心者には何より有り難い觀音の御利益といふものはあるわけであるから、舊江戸の淺草觀音と言ッたら、其の雜沓は、とて

も今日の想像以外である。江戸見物に出て來た人々は、此の淺草觀音を見なければ、江戸を見たのではないと言ッて居ッた通り、全く淺草の觀音樣は、日本國中の人々が、樂園の理想としたところである。

駒形堂

此の觀音の門前から藏前の方へ行く途に、駒形堂と云ふがある。堂は小なりと雖も、古いことに於ては、觀音堂と齡を比すべきものである。昔は此の邊一體に櫻の並木があり、頗る名勝の地であッた。例の遊君高尾が、

君は今駒形あたりほとゝぎす

と吟じた以來、駒形堂も一層有名になッた次第である。尤も此の句、果して高尾の作なるや否や、確と判明しないが、兎に角名高い句であることは事實である。

江戸趣味と淺草、吉原

何れの都でも、住宅、別莊、市場、遊樂地、皆自ら分れて居るが、淺草は即ち江戸時代の遊樂地を代表した一區である。江戸開府當時は、觀音と淺草海苔と隅田川で、名があッたばかりであるが、明暦年間(二百餘年前)吉原が淺草へ移ッてから、江戸趣味なるものは、凡て淺草區で發達したと言ッてもよからう。吉原に船で通ッた者が多いところから、屋形船、猪牙船を始めとして、川船の構造に進歩を來たし、船中の小酌は、自ら食器布團の類に至るまで、船相應に發達をしたと云ふ始末。終には、船中の座敷に掛ける掛物までが發達をした。これが何千噸何萬噸と云ふ樣な大船艦内の裝飾ではなく、言はゞボートに屋根を設けた其の中に、座敷の趣向を移したのであるから、凡てか小柄の發達ではあるが、そこに猶ほ一種の江戸趣味の津々たるものが

あッたのだ。抱一の句に、『猪牙の布團の朝しめり』などとあるが、此等の句の味は、あの川船に乘ッて、始めて了解することが出來るのである。

駕籠が亦吉原に關係して大に進歩した。勿論大名方やお姫樣達の乘る駕籠ではなく、廓通ひの駕籠のことで、これも確に江戸名物の一つであッた。抱一の句に、

飛ぶかごやしぐれ來る夜の膝がしら

と云ふがある。駕籠の如きものさへ、斯く俳味豐かに發達したのである。

それに又食物の進歩が、中々えらいものであッた。山谷の八百膳、根岸の笹の雪、何れも皆廓通ひのお客に因ッて、發達したものである。今日の倫理より批判すれば、吉原は醜業の一廓、其處に憂き身をやつした武士町人は、不品行不道德の痴漢と稱するの外はないが、江戸時代の社會組織上より見れば、あながち無造作に是等の事を排斥するわけにも行かない。淺草觀音の周

圍にあらゆる遊戯物が集まッた如く、吉原には凡ての趣味が集中し又發達した。常磐津でも、清元でも、遊里を唱はぬものはない。小說も芝居も落語も講談も、果ては浮世繪の畫題まで、皆此の遊里を中心としたものだ。若し此の事を仔細に講述するならば、優に數百頁の文字を要すると思ふ。試みに淺草區の地名を考へて見ると、其の如何に趣味的又詩的なるかに驚かざるを得ない。駒形の名は前述の通りであるが、藏前は粹士粹人の住居、樹木には首尾の松、花川戸は助六の居た所、待乳山は英一蝶の唄からの名所、日本堤がきぬ〴〵の別れを惜む長汀曲浦、橋場今戸が朝煙で名高く、淺茅ケ原は一ッ家の悲劇で名高い。此の他、石濱と云ひ、鳥越と云ひ、神田へ寄ッては、柳橋と云ふ狹斜の地がある。此等に依ッて觀るも、江戸趣味は淺草、淺草は吉原と云ふ順序が、事實上已むを得ぬ次第である。昨年の大火後、吉原全廢論さへあるが、そは如何樣にならうとも、昔の江戸風俗史には、永久削除する

ことの出來ぬ所である。

本所區

本所、深川といふと、今でも東京とは違ふ樣にも感ずるが、江戸時代には、武家の下屋敷か、小さな屋敷のみで、武士と云ッても、內職で生活した樣な人が多かッた。四谷、麻布、小石川の小屋敷と同樣であッた。然し江戸の內で、町割の區劃の規則正しきは本所深川である。

土地の低いのと、水の出るのと、下水が行屆かぬから蚊の多いのとは、本所の名物である。所に依ると、寒中だけ蚊帳を吊らぬが、一年の中三百日は蚊帳を用ひると云ふ始末。而かも本所の七不思議などゝ言ッて、どこもかしこも狐狸妖怪の話のみが多かッたのである。然し本所に過ぎたものは津輕の屋敷と言ッたほどで、立派な屋敷も少なくなかッた。特に兩國には回向院があり、こゝには日本一の大相撲がある。其の回向院の後の松坂町には、元祿

十五年十二月十五日、淺野の浪士四十七人が切り込んだ吉良下野介の屋敷跡がある。此等は外の區では見られない所である。それに又本所は砂地だ、爲めに、道路だけは東京第一である。今後も工業地となッて、町の美觀は望まれないかも知れぬが、此の區が郡部に接する方には、江戸の名所が澤山ある。白蛇の出る柳島、龜井戸の天神、向島の櫻、小梅、白鬚、牛の御前、長命寺、又ずッと先へ行くと木母寺、どれも皆風流人を惱殺する所で、江戸の名所としても、蓋し第一流のものであらう。然し此處らも今は、葉櫻藝者などゝいふいかゞはしい女の徘徊する處となッた。又工場からは惡水流れ出て隅田川の白魚もなくなり、屋根船も通らず、大公望をきめこむ釣士も見えず、年々に汚濁い川となッて行く。業平朝臣が聞いたなら、さぞ涙を流すことであらうと思ふ。

深川區

本所區の隣が即ち深川區、こゝも本所とさして變ッた事もないが、本所よりも更に水場で、材木の貯蓄場が多く、木場は有名な材木屋の並んで居る所、江戸時代には贅澤な隱居が、縮緬や更紗づくめの着物で、鯛魚を釣りに出た所である。今は其れも見えず、琴平沖や中川尻では、沙魚釣位が盛であるのみだ。

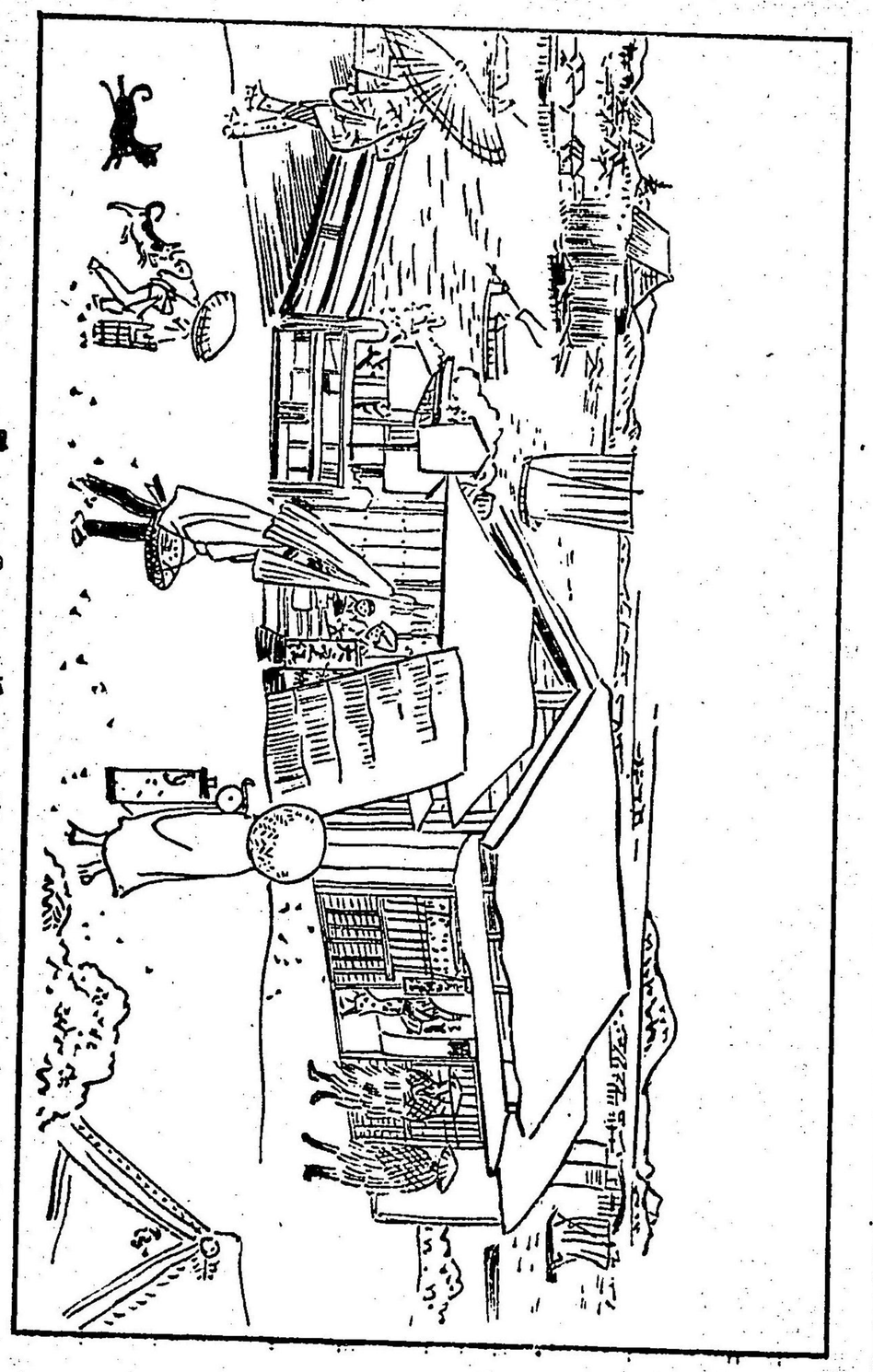
又此の深川に名高かッたのは、羽織と云ッた藝者連で、爲永ものなどの小說の主人公は、何時も深川の羽織であッた。今は洲崎の遊廓があッて、中々盛ではあるが、此の羽織連も、江戸案内には除くことの出來ぬものである。

又深川には、富岡八幡、永代寺、冬木の辨天、三十三間堂、五本松、五百羅漢、指折り來れば中々澤山にあるが、今は八幡の外は、何れも見物に行く

程の價値はない。其の場所さへも分らぬやうになッたのもある。芭蕉の

古池や蛙とびこむ水の音

と詠んだ古池の跡も分らない。たゞ永代橋だけが昔よりは遙かに立派になッた。



郊外

今は東京市と別にして話さなければならぬが、昔はあまり判然たる區別もなかッた。地方の人が江戸見物に來て見に行く所ではないが、江戸の人が春秋、遊山に出る所が中々多かッた。先づ南では品川の海晏寺、『あれ見やしやんせ海晏寺』などと小唄にもある通り、紅葉の名所である。今は岩倉公爵家と、松平侯爵家の墓地となッて寂なが、昔は霜葉二月の花よりも紅なりと稱へられたものである。

池上が日蓮上人の入滅場、今も昔も、御會式には江戸ッ兒を太鼓の音と共に狂はせる。彼等が明治の聖代にも依然として江戸ッ兒をふりまはす鹽梅が面白い。

大森は江戸の昔には麥藁細工があッた。淺草海苔と共にわざ〳〵土産に江

戸へ買ッて來たものである。此の大森も今は東京の内と言ッても可い位である。

又東海道の並木は殆んど伐り盡されて居るが、鈴ヶ森では刑場の露と消えた幡隨院長兵衛を回想する、直ぐ又白井權八のことを聯想する。白井權八のことを聯想すると、又目黑の比翼塚小紫のことを聯想せざるを得ない。此の目黑は、江戸時代よりは遙に盛になッた。又品川の東海寺は、昔よりは大に衰へて、澤庵和尙の居た所なるを知る者ありや否や。矢口の新田神社、祐天寺、此等はあまり昔と變りはないが、大師河原は汽車電車の便利からして賑やかになッて居る。

是より市の東北へ廻ると、大久保の躑躅、此れも電車の御蔭で益々盛である。澁谷、堀の內の妙法寺、此れもあまり變りはない。角筈の十二社が小公園となり、高田の馬場は借家地となり、山吹の里は早稻田大學生の往來となッて居る。此處より、稍〻東すれは板橋、雜司ヶ谷、染井、此れも昔と大した變りはないが、染井は、植木屋の外に、共同墓地の在る所となッた。此處より更に東すれば、飛鳥山、日暮里、道灌山、此等は昔の江戸時代に比べると非常な變化で、王子は王子町となり、東京市中と言ッても可い位。裝束畠の榎には、大晦日の晩に狐が群集したといふが、今では貸長屋の店先になッて居る。滝の川は堂々たる製紙場や、砲兵工廠の煙に包まれ、道灌山も蟲の音絶えて、電氣の光と三味線の音がする樣になッた。樹木といふ樹木は皆煤煙に包まれて、眞黑になッて居る。此の外に堀切の菖蒲が、昔よりも今が盛になッたが、臥龍梅と木下川の梅はあまり變りはない。以上の場所は、新開町の爲めに舊形を變じたるもあり、又は電車汽車の便よりして、著しく俗化もしたが、又盛大になッた所もある。此等の場所には、勿論四季折々に東京人の遊びに行く者があるが、中流以上の人は、多く數十里外に、汽車旅行と

洒落るやうになッたので、郊外の名所は、概して振はなくなッて來た。こゝらで江戸史蹟の筆を擱く。

江戸史蹟 終

江戸史蹟
定價金四拾錢

明治四十五年四月二十日印刷
明治四十五年四月廿四日發行
明治四十五年五月廿五日再版

口述者 戸川殘花

編輯兼發行者 山縣操
東京府下北豐島郡巣鴨町大字上駒込十九番地

印刷者 荻原勝次郎
東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所 博文館印刷所
東京市小石川區久堅町百八番地

不許複製

發行所 東京北豐島郡巣鴨町上駒込二十番地
内外出版協會
電話下谷四百三十八番
振替口座東京三百五十五番

佐々木邦譯

いたづら小僧日記

（第二十一版）定價金四拾錢 郵稅四錢

續いたづら小僧日記

（第十版）定價金參拾錢 郵稅四錢

おてんば娘日記

（第十二版）定價金參拾錢 郵稅四錢

▲『東京朝日新聞』曰く

夏目漱石氏の「我輩ハ猫デアル」と同工にして異曲其て人の頭を解かしむる所は此れ却て彼に優る所あり、天下の奇書也。

▲『文藝倶樂部』曰く、いよ〳〵出でゝ奇拔なるいたづら、讀みて頭を解かざる者なけむ、夏目漱石氏の『猫』に隨喜せし人々は必ずや此書を繙きて多大の興味を感受すべく、實に近來稀に見る珍書と謂ふべし。

▲『新佛教』曰く、實に面白い、讀んでは吹き出し、又讀んでは吹き出す、實に奇想天外より來る底のもので、飜譯と云ふと雖も文章輕妙にして警句に富み、全く飜譯離れがして居る。今日の日本の文壇で、この位のものを書き得る者は、まづ漱石か楚人冠位だらう

▲『笑』曰く、事端の繁きだけいたづらは愈々奇拔になりて、面白きこと限りなし。記者もこれを讀みてくうち自然の失笑を禁じ能はず、傍人より何がそんなに面白きかと問かれたり。近頃珍らしき愉快なる書と云ふべし。

▲『東京日々』亦曰く

奇想天外より落ち來る所漱石の「我輩ハ猫」以上なり、譯文巧妙、凡て創作の風致あり、辛き世に笑ひたき人は一讀すべし。

版元 東京巢鴨町上駒込二丁目三百五十二番地 振替口座東京三百五十五番 內外出版協會

スマイルズ五大著書

▲穩健著實の大教訓▲德性涵養の好讀本
▲獨立自强の活模範▲名士感化の原動力

職分論　金壹圓五拾錢　小包郵稅八錢

品性論　金壹圓五拾錢　小包郵稅八錢

勤儉論　金壹圓五拾錢　小包郵稅八錢

自助論　金壹圓五拾錢　小包郵稅八錢

勞働論　金壹圓五拾錢　小包郵稅八錢

版元 東京巢鴨町上駒込二丁目三百五十二番地 振替口座東京三百五十五番 內外出版協會

各國分類年表

渡邊修二郎編著

定價金八拾錢
郵稅六錢

此書内容を各國に分ち、又事類に分ち、年月及び日に依りて、國事、軍事、經濟、學藝、宗教、雜事を列記す。日本、支那、朝鮮は勿論、歐米主要の諸國の年表に加ふるに、世界總覽年表を以てし、更に附するに事物發明年表を以てす。凡て萬國古來の重要事項殆んど洩す所なく、其時日を搜索する恰も甕中の物を探るが如し。年表の書は世に乏しからずと雖も、一冊の中に世界各國の年表を列載して上記諸般の事項おのゝ遺漏なきを期し、人名地名一も誤謬なきを斷言し得ること本書の如きは稀なり。

袖珍百科全書

渡邊修二郎編纂

定價金壹圓廿錢
郵稅十二錢

此書は天地間有らゆる事項を網羅類聚して、文明の新知識を讀者に供給するを主とす。其體裁歐米諸國に盛に行はるゝ所の小サイクロピデアに同じく、繁簡中を執り、價格の低廉と繙閲の便益とを專らとせり。故に歐米最新の百科全書に基きて其の粹を拔き、和漢古今の緊要事項亦固より之を洩らさず。人々事に當り時に應じて此の中に便益を受くることの無限なるは勿論或は以て家庭の樂みを增す可く、或は又隨時兒童敎育の資料を得るに足るべし。

版元　東京振替　東京巢鴨口座　東京東町上駒込二百三十五番地　内外出版協會

工學士　後藤一郎著

增訂寫眞術全書

《第十二版・定價金五拾錢・郵稅六錢》

「東京日々新聞」評

寫眞は最良絶好の娯樂にして、啻に娯樂たるに止まらず、又無限の實利實益を有せり。本書は後藤工學士が定義より説き起して、淵博の識を闡きて著はす所に係り、先づ寫眞術の影の方法（寫眞一切の術を説明し、圖畫を等附して言の及ばざるを補ふ其の他）器械の使用、撮影の比を見ず、殊に實用に應ぜんと欲して、成るべく理論を避けたれば、寫眞術研究者に取りて毫も遺憾なかるべし。親切なる尋常射利的著書と撰を異にす

「横濱貿易新報」評

後藤工學士が、多年の修技及び經驗に基き、且つ歐米最新の良書を參考して著はせしものなれば說明の詳細緻密なること其

井口丑二譯

飛行機通解

再版
定價金四拾錢
郵稅四錢

版元　東京振替　東京巢鴨口座　東京東町上駒込二百三十五番地　内外出版協會

關默庵根編著

演劇大全

附錄 劇場細見

定價金六拾錢
郵稱 六錢

劇通たらんとする人は讀め

——毎日電報評語——

故關根只誠翁は日本演劇に關して罕に見る篤學の人なり博覽にして然も强記殆ど窺はざるなき人なりき▲著者は翁の世子なり◎著者また乃父の學を承けて劇界の消息に通じ万今生きたる日本演劇史として重きを置かる◎此書筆を阿國歌舞伎以前の日本の歌舞音曲に起し遊女歌舞伎若衆歌舞伎を說き江戸の三座の興隆消長の所以を論じて時勢の好尙と爲政者と演劇との關係を明らめ德川氏三百年の演劇の發達變遷を叙して遺憾なく◎更に劇場の構造芝居の座員作者の變遷大道具小道具淨瑠璃役者評判記と位附新演劇の起原等凡そ劇に關する總ての問題を解決して餘す所なし◎附錄の東都劇場細見珍とすべく◎考證該博論旨穩健筆路輕快

版元 東京振替貯金 東京巢鴨町上駒込百三十二番地 東京東京巢鴨町上駒込百三十五番地 內外出版協會

篠田鐵造編著

幕末百話

定價金四拾錢 郵稱六錢

百話百樣——悉く是れ、今日となりては此書無くば知り難き珍談異聞——面白きこと言ふに及ばず、樂みに讀む書としても宜しく、歷史を裏面より知らんと欲する人には殊に有益なり

維新前後の事柄を、丁度其の頃壯年であつた百人の老人に聽いて、其趣味多く耳新しき物語を錄し集めたのが此書である。話題は固より一人毎に別で、上は德川幕府の政治向から大奧の秘聞等より、下は市井の珍事、藝人の評判等にまで亘り、讀者は皆其の話題について、特別に之を詳しく知つて居る理由があるか、或は自身之に關係し之を經驗した老人である。而も又此等老人達の中には、今日では最早死んで了つた人も多く、即ち其の人の死と共に、其の事全く本書の爲に湮滅を免れたとも謂ふべき秘話異聞も尠くない。又其の談する所、必ずしも幕末當時の事ばかりでなく、ひろく德川時代の人情風俗變遷に關した事も多い。話題一百、各話又それ〴〵其の中に多數の小題目を藏するから、到底之を此處に掲げ盡すことは出來ぬが、要するに一卷の趣味の非常に豐富であることを告げて、其の餘は諸君の想像に委す

曾て『報知新聞』一紙上に於て、十五萬の讀者に日々翌日の新聞を待たせし續き物——社會史の片影、風俗史の斷片、片鱗能く全甲を窺ふべきもの多し。

版元 東京振替巢鴨口座 東京東巢鴨町上駒込三百五十二番地 東京東巢鴨町上駒込三百五十五番地 內外出版協會

干河岸櫻所編著

日本武士氣質

定價金四拾五錢　郵稅六錢

近時『名將言行錄』若しくは『宋名臣言行錄』等の書を愛讀する人甚だ多し。『日本武士氣質』も亦兩書の如きと類を同じうする書なり。然れども『武士氣質』は『武士』のみの『氣質』の意にあらず、武士氣質卽ち『日本武士道』の、種々なる非凡人の上に現はれたる實績の意なり。故に其の人を以て言へば、將軍あり、諸侯あり、武士あり、學者あり、名僧あり、畫家あり、烈婦あり、賢母あり、其の他各種の人物あり。其の事を以て言へば、寬仁大度の談あり、廉潔剛直の談あり、大策あり、大勇あり、忠孝あり、友愛あり、或は壯烈鬼神を泣かしむるものあり、或は風流韻事千古に芳ばしきものあり、或は匹夫も世界に繫かるあるを知るあり、或は死生に超然たるあり、其の他種々なる美談逸話、之を讀むこと多ければいよ〳〵面白く、敎訓、裨益も亦ます〳〵多し。譚すべて一百四十四則、一々別に編者の評論を加ふ。其の言ふ所明快剴切、賢哲の道を談ずるが如く、明吏の事を斷ずるが如し。蓋し是れ實に大に讀者を益すると共に又大に樂しましむるに足るの著述なり。

版元　東京巢鴨町上駒込二十番地　振替口座東京三百五十五番　內外出版協會

291.36
To376e

023709-000-6

291.36-To3

江戸史蹟

戸川 残花ノ著

M45

ADC-0693